

『羣經音辨』卷六について

森 賀 一 恵

富山大学人文学部紀要第59号抜刷

2013年8月

『羣經音辨』 卷六について

森 賀 一 恵

一 はじめに

唐の陸徳明（?-630）の『經典釋文』（以下、『釋文』と略す）は、それまでに蓄積されていた經書および『老子』『莊子』の音・訓・テキストの異同を集大成したもので、成立後は經典を読む際の規範となり、阮元本十三經注疏にも部分的に合刻されている。『釋文』の音注の大半は僻字ではなく、常用の多音字に附されて字の意味を示す役割を擔うため、『釋文』は四聲別義のバイブル的な扱いを受けるが、經注の出現順に字が配列されているので、字ごとの音義關係がわかりにくい。そこで、『釋文』に見える多音字の音義の關係を整理しようとするものが現れたが、その代表的なものが宋の賈昌朝（998-1065）の『羣經音辨』（以下、『音辨』と略す）である¹⁾。『音辨』は辨字同音異、辨字音聲濁、辨彼此異音、辨字音疑混、辨字訓得失の五門に分かれており、辨字同音異は卷一から卷五に、辨字訓得失は卷七に、その他の三門は卷六に収められている。分量的には七巻のうちの五巻を占める辨字同音異が最も多いが、後世に及ぼした影響では卷六の三門に及ばない。中國古代の家塾の教育カリキュラムとして知られる元の程端礼（1271-1345）の『程氏家塾讀書分年日程』は『音辨』卷六のみを轉載しているし、同時代の劉鑑の『經史動靜字音』（1336）などは標音法こそ變えてはいるが、ほとんど『音辨』卷六の引き写しといってもいい。また、近現代の四聲別義研究の中には『音辨』卷六の記載を主な據りどころとしているものも多い。卷六だけがなぜそのように後世に影響を與えたのかについては、以前、森賀2000で少し觸れたことがあるが、本稿では、『音辨』辨字同音異と卷六辨字音聲濁、辨彼此異音、辨字音疑混に重出する字を取り上げ、その記載を比較することにより、『音辨』卷六のみが大きな影響力を持ちえた理由を考えてみたいと思う。

二 『音辨』 辨字同音異と卷六に重出する文字

『音辨』卷一～卷五辨字同音異と卷六辨字音聲濁、辨彼此異音、辨字音疑混に重出する文字が65ある。卷六の出現順に辨字同音異と卷六辨字音聲濁、辨彼此異音、辨字音疑混の記述内容を比較する。『音辨』の卷數の後に四部叢刊續編本の葉數および表裏（表はa、裏はb）を記す。

1) 『音辨』の成立は宋の眞宗天禧年間（1017-1021）、刊行は康定二年（1041）。

(1)女	(23)斂	(45)難
(2)卑	(24)呼	(46)属
(3)傍	(25)将	(47)亨
(4)空	(26)援	(48)假
(5)沈	(27)中	(49)壞
(6)數	(28)間	(50)見
(7)度	(29)選	(51)告
(8)折	(30)思	(52)共
(9)貫	(31)論	(53)遺
(10)斷	(32)喜	(54)畜
(11)分	(33)操	(55)射
(12)解	(34)吹	(56)取
(13)行	(35)編	(57)仰
(14)從	(36)封	(58)少
(15)奔	(37)載	(59)披
(16)還	(38)藏	(60)播
(17)調	(39)卷	(61)樂
(18)彊	(40)祝	(62)被
(19)齊	(41)平	(63)合
(20)簪	(42)累	(64)夏
(21)冥	(43)與	(65)近
(22)塵	(44)比	

(1) 女

『音辨』卷五(6a)「女，婦人也（尼呂切），女，妻也（尼句切），女，爾也（音汝）」

『音辨』卷六(1a)辨字音清濁「女，未嫁之稱也（尼呂切），以女嫁人曰女（下尼据切，書曰女于時²⁾」

『廣韻』上八語・女（尼呂切）小韻「女，禮記曰，女者如也，如男子之教，尼呂切，又尼慮切」，去九御・女（尼據切）小韻「女，以女妻人也」。

2) 『尚書』堯典「女于時，觀厥刑于二女」偽孔傳「女，妻…，堯於是以二女妻舜，…」釋文「女于，上而據反」。

『釋文』の約180の「女」の音のうち九割以上は「音汝」だが、これは『釋文』によく見られる被注字が他の字に通用する場合、本字を用いた直音注である³⁾。「女」に附される「音汝」の大半は「女」を二人稱代詞に讀ませようとするものなのである⁴⁾。「如字」の「男女」の「女」には普通は音は附かない。「めあわせる」という場合は去聲の音が附く⁵⁾。『音辨』 辨字同音異では『釋文』の注音状況が記述されるが、卷六辨字音清濁は『釋文』に最も多い注音例ではなく、名詞・動詞間の品詞變換型語形變化のようにみえる二音二義を取り上げる。

(2) 卑

『音辨』 卷一(25b)「卑，賤也（補移切），卑，下也（便俾切，詩謂山蓋卑⁶⁾），卑謹，鄭人也（婢支切，鄭康成曰，卑謹艸創之⁷⁾），卑居，鷦斯也（音匹，又必移切）卑，與也（必利切，禮鄭康成引律弃妻卑所賚⁸⁾，又婢支切）」。

『音辨』 卷六(2b)辨字音清濁「卑，下也（補支切，對高之稱），下之曰卑（部止切，劉昌宗曰，禹卑宮室⁹⁾）」

『廣韻』 上平五支・卑（府移切）小韻「卑，下也，賤也，亦姓，…」上四紙・俾（并弭切）小韻「俾，使也，從也，職也，俾，上同，說文曰益也，一曰俾門侍人」

「卑」の本音は「補移切」（平聲）である。しかし、『釋文』では「如字」の場合に一説として「音婢」（便俾切）も併せて載せられる場合があるほか、「俾」に通じる「卑」に「必爾反」（上聲）が付き、賈疏が「卑」に作る「裨謹」の「裨」には「婢支反」（並母），鳥の名の「卑居」の「卑」には「音匹」（入聲，滂母）の音が附いている。ただ、『音辨』 辨字同音異が最後に挙げる「卑，與也」につ

3) 時建國 2005 に「被注字有通假他字的現象，陸氏“音某”向讀者提示此處當以本字本音讀出」。

4) ただし、「音汝」がすべて「女」を二人稱代詞に讀むよう指示するものではなく、『周禮』 春官・宗伯の釋文「女秩，音汝」のような例外もある。

5) 「女于，上而據反」（『尚書』堯典）、「女於，尼據反，注曰女同」（『左傳』桓公十一年傳）、「女以，昵據反，注曰女同」（『左傳』莊公二十八年傳）。

6) 小雅・正月。「謂山蓋卑，為岡為陵」箋「此喻為君子賢者之道，人尚謂之卑，況為凡庸小人之行」釋文「卑，本又作庫，同，音婢，又必支反」。『廣韻』 上四紙・婢（便俾切）小韻に「婢，女之下」，「庫，下也，或作俾，又音卑，說文曰中伏舍也，一曰屋庫」。

7) 『周禮』 春官・大祝「作六辭，以通上下親疏遠近，一曰祠，二曰命，…」注「命，論語所謂為命裨謹草創之，…」釋文「裨，婢支反」。阮元本賈疏は鄭注を引いて「裨謹」を「卑謹」に作る。

8) 『禮記』 雜記下「有司官陳器皿，主人有司亦官受之」注。ただし，阮元本は「卑」を「界」に作り，「齋」を「賚」に作る。「齋」については阮元の校勘記があり，「賚」に作る本があることが知られるが，「界」については校勘記もなく，釋文も「界，必利反，與也，又婢支反，償也」とする。

9) 『周禮』 冬官・匠人「周人明堂，度九尺之筵，東西九筵，南北七筵，堂崇一筵，五室凡室二筵」注「禹卑宮室」釋文「禹卑，如字，劉音婢」。

いては通行本『釋文』は「𡵓」に作る例で、「卑」の音とすべきではない。『音辨』『辨字同音異』は、それらの『釋文』の「卑」の注音を全て並べるが、卷六辨字音清濁は「如字」の後に劉昌宗説としてしばしば見える「音婢」を動詞の音と見做し、「ひくい」なら本音（幫母，支韻），「ひくくする」なら「部止切（音婢，便俾切に同じ）（並母，紙韻）」とする。義釋はどちらも「下」を用いて、品詞の違いとでもいうべき相違を明確にしている。

(3) 傍

『音辨』卷三(11b)「傍，近也（歩光切），傍傍，不得已也（布彭切，詩王事傍傍¹⁰⁾」。

『音辨』卷六(3a)辨字音清濁「傍，近也（蒲郎切），近之曰傍（蒲浪切）」。

『廣韻』下平十一唐・傍（歩光切）小韻「傍，亦作旁，側也，說文曰近也，又羌姓，去四十二宕・傍（蒲光切）小韻「傍，蒲光切，又蒲郎切」。

阮元本の經文に見える「傍」は『毛詩』小雅・北山の「傍傍」のみで「旁」に比べるとあまり使用頻度の高い文字ではない。『釋文』では擬態語の「傍傍」には「旁旁」同様、『廣韻』などには見えない「布彭反」という反切が附くが，その他は『廣韻』にも記載がある音が附く。平聲（「蒲郎反」¹¹⁾「薄剛反」¹²⁾）が3例，去聲（「薄浪反」¹³⁾「蒲浪反」¹⁴⁾）が2例あるが，去聲の反切が附く「傍」はどちらも目的語をとる動詞である。『音辨』辨字同音異は平聲と擬態語の音のみ載せるが，卷六辨字音清濁はやはり形態論的語形變化にみえる二音二義を取り上げ，どちらも「近」を用いて釋し，反切上字を「蒲」に統一している。

(4) 空

『音辨』卷三(9a)「空，虚也（苦工切），空，窮也（苦貢切，詩不宜空我師¹⁵⁾），空，竅也（音孔）」。

10) 小雅・北山。傳「傍傍然，不得已」釋文「傍傍，布彭反，不得已也」。また，鄭風・清人「駟介旁旁」釋文「旁，補彭反，王云，彊也」。「傍傍」「旁旁」は釋義は異なるが，同音である。

11) 『儀禮』鄉射禮「司射進與司馬交于階前相左，由堂下西階之東北面視上射，命曰無射獲，無獵獲，上射揖司射退，反位」注「射獲謂矢中人也，獵矢從傍」釋文「從傍，蒲郎反，或作旁」。

12) 『禮記』中庸「使天下之人齊明盛服，以承祭祀，洋洋乎如在其上，如在其左右」注「明猶潔也，洋洋，人想思其傍優之貌」釋文「其傍，皇薄剛反，謂左右也，徐方岡反」。『莊子』人間世「七圍八圍，貴人富商之家求禪傍者斬之」釋文「傍，薄剛反，崔云，禪傍，棺也，司馬云，棺之全一邊者，謂之禪傍」。

13) 『毛詩』小雅・黍苗「我任我輦，我車我牛」傳「有負任者，有輓輦者，有將車者，有牽傍牛者，…」釋文「牽傍，薄浪反」。『周禮』秋官・罪隸「凡封國若家，牛助為牽傍」注に「罪隸牽傍之，在前曰牽，在旁曰傍」。牛の前にいて引くのが「牽」で横について引くのが「傍」であるらしい。

14) 『左傳』哀公二十七年傳「及濮」注「濮水，自陳留酸棗縣，傍河」釋文「傍河，蒲浪反」。

15) 『毛詩』小雅・節南山。傳「空，窮也」箋「不宜使此人居尊官，困窮我之衆民也」。釋文「空我，苦貢反，注同，窮也」。

『音辨』卷六(3a)辨字音清濁「空，虛也（苦紅切），虛之曰空（苦貢切）」。

『廣韻』上平一東・空（苦紅切）小韻「空，空虛，書曰，伯禹作司空，又漢複姓，…」，去一送・控（苦貢切）小韻「空，空缺，又苦紅切」。

上一董「孔（康董切）小韻「孔，孔穴也，又空也，甚也，亦姓，…」

現代漢語でも「空」には平聲（kōng）と去聲（kòng）の區別があるが、『釋文』の音が附く「空」10例のうち8例が上聲の「音孔」である¹⁶⁾。これは「空」が「孔」に通用することを示す直音注である。平聲と去聲はそれぞれ1例のみで、平聲の反切は擬態語「空空」に附く¹⁷⁾。去聲の反切は『音辨』卷三に見える小雅・節南山の「空」に附くが、それを傳箋は「困窮させる」という意味の動詞に解釋している。『音辨』辨字同音異は『釋文』の「空」の音を網羅するが、卷六辨字音聲濁は品詞變換型語形變化にみえる二音二義のみを挙げ、どちらも「虚」を用いて釋す。

(5) 沈

『音辨』卷四(12b)「沈，沒也（直林切），沈，投物於水也（直禁切），沈，國也（式荏切，春秋有沈子¹⁸⁾」。

『音辨』卷六(3a)辨字音清濁「沈，沒也（直金切，對浮之稱），沈之曰沈（下直禁切，春秋傳沈玉而濟¹⁹⁾」。

『廣韻』下平二十一侵・沈（直深切）小韻「沈，沒也，說文曰，陵上瀉水也，又漢複姓，…」，直深切，又尸甚切，上四十七寢・沈（式任切）小韻「沈，國名，古作邾，亦姓，…」，式任切，又丈林切，去五十二沁・鳩（直禁切）小韻「沈，又直壬切」。

「沒也」（沈む）の「直林切」、「國也」（國名）の「式荏切」は、それぞれ現代漢語のchénとshěnに當るが、去聲の「直禁切」に當る第四聲のchèn という音は現代漢語にはない。周祖謨1946、Downer 1959、周法高1962、吳傑儒1983、孫玉文2007などは、『音辨』の記述を自動詞（沈む）を平聲に他動詞（沈める）を去聲に讀むとすると解釋し、それを是とするが、黃坤堯1992も

16)「關空，戚音孔，下同」（『周禮』天官・敝人），「六空，音孔」（『周禮』春官・小師），「七空，音孔，下同」（笙師），「穀空，音孔」「鑿空，音孔」（冬官・輪人），「空，音孔，又如字，下同」（函人），「空，徐音孔」（『禮記』月令），「空，音孔，壘孔小穴也，李云，小封也，一云蟻冢也」（『莊子』秋水）

17)『論語』子罕「有鄙夫問於我，空空如也」「空空，如字，鄭或作恹恹，同，音空」。泰伯「恹恹而不信」注に「包曰，恹恹，慙也」，釋文「恹恹，音空」。「慙」は誠実であること。

18) 昭公四年『左傳』釋文「沈子，音審」，『穀梁傳』釋文「沈子，音審」。

19)『左傳』襄公十八年傳。釋文「沈玉，音鳩，或如字」。

指摘するように、『釋文』で去聲の音のみ載せるのは一例のみ²⁰⁾で、必ずしも『音辨』の記述のような區別があるわけではない。例の如く、『音辨』辨字同音異は『釋文』に見える音はすべて載せるが、卷六辨字音聲濁は形態論的語形變化にみえる二音二義のみを取り上げる。

(6) 數

『音辨』卷二(4b)「數，計也（色主切），數，計目也（尸故切），數，屢也（色角切），數，迫也（音促，禮數目顚脰²¹⁾，又粗角切），數，疾也（音速，禮衛音趨數煩志²²⁾」。

『音辨』卷六(3a)辨字音清濁「數，計之也（色主切），計之有多少曰數（色句切）」。

『廣韻』上九麋・數（所矩切）小韻「數，說文計也，所矩切，又所句、所角二切」，去十遇・揀（色句切）小韻「數，算數，周禮有九數，…，又色矩、色角二切，均又音速」，入四覺・朔（所角切）「數，頻數」。

『廣韻』の「所矩切」、「色句切」、「所角切」，『音辨』の「色主切」「尸故切」「色角切」はそれぞれ現代漢語の shǔ、shù、shuò に当たり、音義の對應關係も今と変わらない。『釋文』では去聲の音が「如字」で、上聲の「色主反」「所主反」や入聲の「色角反」「音朔」などが頻見するが、「速」に通じる直音注「音速」も『禮記』に3例あり，『周禮』冬官・梓人の『釋文』にまた違った音が附される。『音辨』辨字同音異は『廣韻』にも見える三音のほか、「音速」や『周禮』釋文の音も記すが，卷六辨字音清濁は名詞と動詞の品詞變換型語形變化のように見える二音のみを取り上げ，どちらも義釋に「計」字を用い，反切上字に「色」を用いる。

(7) 度

『音辨』卷一(25a)「度，揆也（大各切），度，法制也（徒故切），度，居也（音宅，書分命和仲，度西曰柳穀，鄭康成讀²³⁾」。

20) 『左傳』定公十三年傳「蔡侯歸及漢，執玉而沈曰，余所有濟漢而南者，有若大川」釋文「沈之，如字，又音鳩」。

21) 『周禮』冬官・梓人に「銳喙決吻，數目顚脰，小體騫腹，若是者謂之羽屬」。釋文「數，劉音促，李粗角反」。孫詒讓『正義』は『毛詩』小雅・魚麗「魚麗于罟，鰭鯨」傳「庶人不數罟」の釋文「不數，七欲反，又所角反，陳氏云，數，細也」を引き，「數」を「細」と解釋する。「音促」と「七欲反」は同音。

22) 『禮記』樂記「文侯曰，敢問溺音何從出也，子夏對曰，…，衛音趨數煩志，…」注「趨數讀為促速，聲之誤也」，釋文「趨音促，數音速」。このほか曾子問「不知其已之遲數，則豈如行哉」，注に「數讀為速」，釋文に「遲數，音速，出注」，祭義「仲尼嘗，奉薦而進，其親也慤，其行趨趨以數」，注「數之言速也」，釋文に「以數，色角反，速也，徐音速，注同」。三例とも注は「數」を「速」に讀ませている。

23) 『周禮』天官・縫人「衣袷柳之材」注「柳之言聚，諸師之所聚，書曰分命和仲，度西曰柳穀」。ただし，阮元本『尚書』堯典は「分命和仲，宅西曰昧谷」に作る。また，その上文「分命羲仲，宅嵎夷曰暘谷」偽孔傳に「宅，居也」。

『音辨』卷六(3a)辨字音清濁「度，約也（徒洛切），約之有長短曰度（徒故切，書平律度量²⁴⁾」。

『廣韻』去十一暮・渡（徒故切）「度，法度，又姓，…，又徒各切」，入十九鐸（徒落切）「度，度量也，又音渡」。

『廣韻』の去聲と入聲の二音は，現代漢語の dù と duó に相當し，意味と音の對應關係も現代語と変わらない。『釋文』では去聲の方が「如字」で動詞の「度」には「待洛反」「大各反」「徒洛反」などの反切が附く。『音辨』卷一辨字同音異の擧げる第三の音「音宅」は通行の阮元本『尚書』では「度」を「宅」に作っており，偽孔傳でも「宅，居也」としていることから，「度」を本字の「宅」に讀ませようとするもので，「度」本來の音ではない。卷六辨字音清濁は名詞、量詞と動詞の品詞變換型語形變化に見える二音のみを取り上げ，義釋に共通して「約」字を用いて概念的意味の共通性を示すとともに，同じ反切上字「徒」を用いて聲母が同じであることを示している。

(8) 折

『音辨』卷五(5a)「折，曲撓也（之列切），折，斷也（士列切），折折，安舒也（徒兮切，禮，吉事欲其折折爾²⁵⁾），折，斷牲骨也（音制，春秋傳，司馬致折俎²⁶⁾，徐邈讀，又之列切）」

『音辨』卷六(3b)辨字音清濁「折，屈也（之舌切），既屈曰折（市列切）」

『廣韻』上平十二齊・哢（杜奚切）「折，禮記云，吉事欲其折折爾，謂安舒貌」，入十七薛・哲（旨熱切）小韻「折，拗折，又虜複姓，…，又常列切」，入十七薛・折（常列切）小韻「折，斷而猶連也，說文斷也，…」。

『廣韻』に見えない「音制」は『左傳』の「折俎」に附された音である。宴禮に用いられる生贄をのせる禮器「折俎」は『音辨』が擧げる『左傳』襄公二十七年傳の例のほかにも、『儀禮』に20例、『禮記』少儀、『左傳』宣公十六年傳に見えるが，すべて「旨熱切」（「之列切」）に當る反切のみ記されており，徐邈の「音制」という音が併記されるのは襄公二十七年傳の釋文だけである。「杜奚切」（「徒兮切」）は『禮記』檀弓上に見える「折折」に附された音だが，注が『詩』を引いて「折折」を「提提」に讀ませているために附されたものである。『音辨』辨字同

24) 『尚書』舜典に「同律度量衡」，釋文「度，如字，丈尺也」。

25) 『禮記』檀弓上。注「安舒貌，詩云，好人提提」，釋文「折折，大兮反，安舒貌，注同」。魏風・葛屨「好人提提」傳「提提，安謐也」釋文「提，徒兮反」。

26) 『左傳』襄公二十七年傳「司馬置折俎」「折俎，體解節折升之於俎，合卿享宴之禮，…」釋文「折，之設反，注同，徐又音制」。

音異は、『釋文』が「折」に附す音を全て列べる²⁷⁾が、卷六辨字音清濁は薛韻の二音「旨熱切」(之列切、之舌切)(章母)と「常列切」(市列切)(禪母)を取り上げる。「甲、乙也、既乙曰甲」という釋義の形式は「折」のほか、以下の「貫」「斷」「分」「解」でも用いられている。周祖謨は『音辨』卷六を引いて、禪母を自動詞、章母を他動詞とするが²⁸⁾、黃坤堯は『釋文』の「折」の注音では禪母薛韻の反切は「死」か「跪跌」の意味の場合のみに附されるとする²⁹⁾。

(9) 貫

『音辨』卷三(6b)「貫，穿也（音官），貫，事也（古亂切，詩三歲貫女³⁰⁾），貫，習也（古患切，春秋傳貫瀆鬼神³¹⁾）」。

『音辨』卷六(3b)辨字音清濁「貫，穿也（古桓切，易貫魚以宮人寵³²⁾），既穿曰貫（古玩切）」。

『廣韻』上平二十六桓・官（古丸切）小韻「貫，穿也，又音灌，去二十九換・貫（古玩切）小韻「貫，事也，穿也，累也，行也，又姓，…」。

去三十諫・慣（古患切）小韻「慣，習也」。

「貫」は現代漢語ではguàn一音のみだが、『廣韻』は平聲と去聲の音を載せ、『釋文』ではその二音の他に「慣」の通用字に「慣」の音が附く。『音辨』辨字同音異は「慣」に通用する例の音も挙げるが、卷六辨字音聲濁は『廣韻』にも見える二音のみ載せ、反切上字を「古」に揃え、義釋には「穿」という同じ字を用いる。

(10) 斷

『音辨』卷五(17b)「斷，截也（音短），斷，絶也（徒旱切），斷，決也（都亂切）」。

『音辨』卷六(4a)辨字音清濁「斷，絶也（都管切），既絶曰斷（徒管切）」。

『廣韻』上二十四緩・短（都管切）小韻「斷，斷絶，俗作斷，断又徒管切，上二十四緩・斷（徒管切）「斷，絶也」，去二十九換・鋸（丁貫切）小韻「斷，決斷，俗作斷、断」。

黃坤堯によれば、『釋文』では「斷」の注音例は143あり、音は四種だという³³⁾。『釋文』の

27) ただし、『釋文』で「折」に附される反切に「市列切」に當る音は見えない。卷六辨字音聲濁は反切上字に禪母の「市」を用いている。

28) 周祖謨 1946。四 四聲別義與語詞之分化

29) 黃坤堯 1992。第四章《釋文》動詞異讀分類研究・第一節〔辯證〕，p.98。

30) 魏風・碩鼠。傳「貫，事也」釋文「貫女，古亂反，徐音官，宮事也」

31) 『左傳』昭公二十六年傳。注「貫，習也」釋文「貫瀆，古患反，習也」

32) 『周易』剥。釋文「貫魚，古亂反，徐音官，穿也」

33) 黃坤堯 1992。第四章《釋文》動詞異讀分類研究・第一節〔辯證〕，p.99。

「斷」の反切を見ると、確かに『廣韻』や『音辨』の擧げる三音の他に定母換韻の反切が見えるが³⁴⁾、数も極めて少なく、端母換韻の「斷」との意味の違いも認められない。そのためか、『音辨』辨字同音異は『廣韻』にも見える三音のみを列べ³⁵⁾、卷六辨字音聲濁は緩韻の端母と定母の二音を取り上げる。周祖謨は端母緩韻を他動詞、定母緩韻を自動詞と形容詞だとするが³⁶⁾、黃坤堯はそれに疑義を呈する³⁷⁾。

(11) 分

『音辨』卷一(12b)「分，別也（府文切），分，限也（扶問切），分，均也（甫門切，春秋傳救患分災³⁸⁾）」。

『音辨』卷六(4a)辨字音清濁「分，別也（方云切），既別曰分（扶問切）」。

『廣韻』上平二十文・分（府文切）小韻「分，賦也，施也，與也，說文別也」，去二十三問・分（扶問切）小韻「分，分割，扶問切，又方文切」。

『廣韻』に見える二音の區別は現代漢語にも見られる。『音辨』辨字同音異の擧げる『廣韻』に見えない「甫門切」は『釋文』の「甫問反」の誤りである可能性が高いが、いずれにしろ、他の二音と同音ではない。卷六辨字音聲濁は『廣韻』記載の二音を取り上げ、「別」字を用いて、音の違いが品詞變換的な語形變化であるかのように解釋する。

(12) 解

『音辨』卷二(11b)「解，判也（工買切），解，散也（戸買切），解，𢶏也（音懈）」。

『音辨』卷六(4a)辨字音清濁「解，釋也（古買切），既釋曰解（胡買切）」。

『廣韻』上十二蟹（胡買切）「解，曉也，又解廌，仁獸，似牛一角，亦姓，…，又虜複姓，…，又佳買、古賣二切」，上十二蟹・解（佳買切）小韻「解，講也，說也，脫也，散也」，去十五卦・懈（古隘切）小韻「解，除也」，去十五卦・邂（胡懈切）小韻「解，曲解，亦縣名，…，又古賣、古買、胡買三切」。

34) 『左傳』襄公十年傳「其斷，徒亂反」、『莊子』天地「其斷，徒亂反，下同，本或作故」

35) ただし、『釋文』の反切は緩韻か換韻で「徒早切」に當る反切は見えない。卷六では反切下字に緩韻の「管」を用いている。

36) 周祖謨 1946。四 四聲別義與語詞之分化。

37) 黃坤堯 1992。第四章《釋文》動詞異讀分類研究・第一節〔辯證〕，p.99。

38) 『左傳』僖公元年「凡侯伯，救患，分災，討罪，禮也」注「分穀帛」釋文「分，甫問反，又如字」。『羣經音辨』の「甫門反」は『釋文』には見えない。「甫問反」は『左傳』昭公十四年傳「分貧」の釋文にも見えるが、又音として擧げられる徐邈の説である。

「解」の『釋文』での注音状況については黄坤堯が既に詳細に述べている³⁹⁾。『音辨』辨字同音異は『廣韻』の四音のうち「胡懈切」(匡母卦韻)を除く三音を列べるが、卷六辨字音清濁は蟹韻の見母と匡母の音を取り上げる。黄坤堯は動詞の動作が持続しているか完了しているかによる區別だとし、Downer 1959では、不定形(to unloosen)と過去分詞(unloosened)に譯しており、どちらも動詞の屈折のような語形變化と看做しているようである。

(13) 行

『音辨』卷一(18b)「行，步趨也(戸庚切)，行，列也(胡剛切)，行，人所施也(下孟切)，行行，剛彊也(戸浪切，論語子路行行⁴⁰⁾)」。

『音辨』卷六(4a)辨字音清濁「行，履也(戸庚切)，履迹曰行(下孟切，或履而有所察視，亦曰行)」。

『廣韻』下平十一唐・航(胡郎切)小韻「行，伍也，列也，又戸庚、戸浪、戸孟三切」，下平十二庚・行(戸庚切)小韻「行，行歩也，適也，往也，去也，又姓，…，戸庚切，又戸剛、戸浪、下孟三切」，去四十二宕・吭(下浪切)小韻「行，次第」，去四十三映・行(下更切)小韻「行，景迹，又事也，言也，下更切，又胡郎、胡浪、胡庚三切」。

現代漢語でも「行」には xíng(「戸庚切」)、háng(「胡剛切」「胡郎切」)、hàng(「戸浪切」「下浪切」)の三音の區別があり、「下孟切」「下更切」に相當する xìng も『新華字典』『現代漢語詞典』などに名詞の「行為」の意味で用いられる「行」の「旧讀」として載せられている⁴¹⁾。意味も hàng のほかは『新華字典』『現代漢語詞典』に記載されるものと変わらない。『音辨』辨字同音異は四音全てを列べるが、卷六辨字音聲濁は動詞と名詞の品詞變換型語形變化のようにみえる匡母の平聲と去聲の音を取り上げる。

(14) 從

『音辨』卷三(14a)「從，隨也(在容切)，從，籀其後也(才用切)，從，南北也(則庸切，詩衡從其畝⁴²⁾)，從容，緩也(七容切，禮從容中道⁴³⁾)，從，放也(音縱，禮欲不可從⁴⁴⁾)，從從

39) 黄坤堯 1997, pp.187-203 「『釋文』“解”字音義辨析」参照。

40) 先進。集解「行行，剛強之兒」。釋文「行行，胡浪反，剛貌，或戸郎反」。

41) 森賀 2012 p.108 参照。

42) 齊風・南山。釋文「從，足容反，注同，韓詩作出云南北耕曰出」。

43) 『禮記』中庸。釋文「從容，上七容反」。

44) 『禮記』曲禮上に「敖不可長，欲不可從，志不可滿，樂不可極」注に「四者慢遊之道，桀紂所以自禍」。釋文「可從，足用反，放縱也」。

高大也（音崇，禮爾無從從爾⁴⁵⁾，又仕江、作孔二切），從容，擊也（音春，禮善待問如撞鍾，待其從容，然後盡其聲⁴⁶⁾」。

『音辨』卷六(4a)字音清濁「從，隨也（疾容切），隨後曰從（秦用切）」

『廣韻』上平三鍾・從（疾容切）小韻「從，就也，又姓，…，疾容切，又即容、七恭、秦用三切」，上平三鍾・縱（七恭切）小韻「從，從容，又疾容、秦用二切」，去三用・從（疾用切）小韻「從，隨行也，疾用切，又才容切」。

上平三鍾・縱（即容切）小韻「縱，縱橫也，即容切，又子用切」

去三用・縱（子用切）小韻「縱，放縱，說文緩也，一曰舍也，子用切，又子容切」

『音辨』辨字同音異は『廣韻』の三音のほか、に、『釋文』に見える「從」の音を四つ載せる⁴⁷⁾。卷六辨字音清濁は意味の關連性を示すべく同じ「隨」を用いて、動詞「從う」と名詞「從者」の二義を取り上げている。

(15) 奔

『音辨』卷四(8b)「奔，逃也（博昏切），奔走，歸趣也（布付切，書矧咸奔走⁴⁸⁾），奔，覆敗也（音奮，詩傳奔軍之將⁴⁹⁾）」

『音辨』卷六(4a)辨字音清濁「奔，趨也（逋門切），趨走曰奔（布付切，又逋悶切）」

『廣韻』上平二十三魂・奔（博昆切）小韻「奔，奔走也，說文作奔」，去二十六恩・奔（甫悶切）小韻「奔，甫悶切，又音犇」

「奔」は十三經注疏の經文では決して出現頻度の低い字ではないが、『釋文』での注音は『音辨』辨字同音異が引く二箇所のみであり、『毛詩』大雅・行葦の「音奮」は「奔」を「賁」に讀ませるものである。『音辨』の「博昏切」「逋門切」は『廣韻』の「博昆切」と同音だが、「逋悶切」

45)『禮記』檀弓上。阮元本は「爾母從從爾」に作る。注に「從從謂大高」釋文に「爾母，音無，後同，從從，音摠，高也，一音崇，又仕江反」。

46)『禮記』學記に「善待問者如撞鍾，叩之以小者則小鳴，叩之以大者則大鳴，待其從容，然後盡其聲。不善答問者反此」注に「從讀如富父春戈之春，春容謂重撞擊也，…，從或為松」釋文「從容，從依注讀爲春，式容反」。「富父春戈」は『左傳』文公十一年傳「富父終甥椿其喉，以戈殺之」注に「椿猶衝也」釋文「椿，舒容反，衝也」。

47)「從」の『釋文』の音の音義關係と現代漢語の音との對應については森賀 2010 p.117 參照。

48) 君夷。釋文「奔走，奔又作本，走又作奏，音同，詩傳云，喻德宣譽曰奔奏，鄭箋云，奔走，使人歸趨」。「鄭箋」は大雅・緜「子曰有奔奏」箋。

49) 大雅・行葦「序賓以賢」傳。『禮記』射義の引用。釋文「奔軍，音奮，奮，覆敗也」。阮元本『禮記』射義は「奔」を「賁」に作る。注に「賁讀為偵，偵猶覆敗也」釋文に「賁軍，依注讀爲偵，音奮，覆敗也」。

はその去聲音，「布付切」は上聲音で『廣韻』の「甫悶切」とは異なる。また、『釋文』ではその異讀が注されるのは一箇所のみであることから、実際に『音辨』卷六辨字音清濁が記述するような読み分けがあったとは考えにくい。

(16) 還

『音辨』卷一(17b)「還，復也（戸關切），還，回也（音旋），還，繞也（戸串切，禮還市朝而為道⁵⁰⁾」。

『音辨』卷六(4b)辨字音清濁「還，回也（胡關切），回遶曰還（胡串切）」。

『音辨』卷六(11b)辨彼此異音「復之速曰還（音旋，亦音全⁵¹⁾，緩曰還（戸關切）」。

『廣韻』上平二十七刪・還（戸關切）小韻「還，反也，退也，顧也，復也，戸關切，又音旋，下平二仙・旋（似宣切）小韻「還，還返」。

『音辨』辨字同音異が最後に挙げる「戸串切」は『周禮』注の釋文が又音として引く劉昌宗說，辨彼此異音が又音として挙げる「音全」は徐邈說である。辨字同音異は現代漢語にも區別があり，『廣韻』にも記載のある二音のほかに劉昌宗說も列べ，辨字音清濁は「如字」の「胡關切」と劉說を，辨彼此異音では『廣韻』の二音を列べ，「音旋」には又音として徐說も加えている。

(17) 調

『音辨』卷一(21a)「調，和也（徒遙切），調，和適也（徒沓切），調，朝也（陟留切，詩怒如調飢⁵²⁾」。

『音辨』卷六(4b)辨字音清濁「調，和也（徒聊切），和適曰調（徒料切）」。

『廣韻』下平三蕭・迢（徒聊切）「調，和也，又姓，…，又徒料切」，下平十八尤・輶（張流切）「調，朝也，詩云怒如調飢，本又音條」，去三十四嘯・藿（徒弔切）「調，選也，韻調也，又音苕」。

『廣韻』、『音辨』辨字同音異は現代漢語の tiáo と diào に當る二音のほかに，「朝也」と訓じられる「調飢」の「調」に附される音を載せている。『音辨』卷六辨字音清濁は三音のうち，現代漢語の二音に對應する二音を取り上げ，共通の反切上字「徒」と解釋用字「和」を用いる。

50) 『周禮』夏官・量人「營軍之壘舍，量其市朝州塗軍社之所里」注「鄭司農云，量其市朝州塗，還市朝而為道也」釋文「塗本又作塗，還市，如字，劉戸串反」。

51) 『尚書』周官の釋文に「還，音旋，徐音全」。

52) 周南・汝墳。傳「調，朝也」釋文「調，張留反，朝也，又作輶，音同」。

(18) 彊

『音辨』卷五(8b)「彊，弓有力也（其良切），彊，堅也（其亮切，禮彊樂用賁⁵³⁾」。

『音辨』卷六(4b)辨字音清濁「彊，堅也（其良切），堅固曰彊（其亮切）」。

『廣韻』下平十陽・強（巨良切）小韻「強，健也，暴也，說文曰斬也，又姓，…」「彊，與強通用，說文曰弓有力也」，上三十六養・彊（其兩切）小韻「彊，說文云，弓有力也，或作強，又姓，…，又其良切」，去四十一漾・彊（居亮切）小韻「彊，屍勁硬也」。

現代漢語にも『廣韻』に見える三音の區別（qiáng, qiǎng, jiàng）はあるが、『音辨』は辨字同音異も辨字音清濁も平聲と去聲のみを挙げる。反切用字は同じだが，釋義については，辨字同音異は本音の訓には『說文』の說解を用い，辨字音清濁はどちらも「堅」字を用いる。

(19) 齊

『音辨』卷三(7a)「齊，等也（徂兮切），齊，莊也（側皆切），齊，和也（才細切），齊，升也（子奚切，禮地氣上齊⁵⁴⁾），齊齊，恭也（子禮切，禮齊齊乎其敬也⁵⁵⁾），齊，黍稷也⁵⁶⁾，凶服裳下緝也⁵⁷⁾（即夷切），采齊，樂章也（疾私切，禮趨以采齊⁵⁸⁾，又才細切），齊，翦也（子淺切，禮馬不齊髦⁵⁹⁾」。

『音辨』卷六(4b)辨字音清濁「齊，等也（徂奚切），等平曰齊（在計切，禮分珍曰齊⁶⁰⁾」。

『廣韻』上平十二齊（徂奚切）「齊，整也，中也，莊也，好也，疾也，等也，亦州名，…，又姓，

53)『周禮』地官・草人。注「強樂，強堅者」釋文「彊，其兩反，注同」。

54)『禮記』樂記。注「齊讀為躋，躋，升也」，釋文「上齊，上，時掌反，齊，依注讀為躋，又作躋，子兮反，升也」。

55)『禮記』祭義。釋文「齊齊乎，如字，舊子禮反」

56)「齊盛」の「齊」。「齋」に通じる。『釋文』に「齊盛，音咨，本亦作齋」（『禮記』表記），「齊盛，本亦作齋，與齋同，音咨，下及注同」（『禮記』祭統），「齊盛，音咨」（『禮記』昏義）。

57)「齊衰」の「齊」。「齋（齊衣）」に通じる。『釋文』に「齊衰，音咨，緝也，後同」（『儀禮』喪服），「衰，本又曰齋，音咨，…，下文同」（『禮記』曲禮下），「齊衰，音咨，又作齋」（『禮記』喪服小記），「齊衰，音咨，下同」（『禮記』問傳），「齊衰，音咨」「齊衰，音咨，本又作齋」（『禮記』喪服四制），「齊衰，音咨，本亦作齋，…」(『公羊傳』隱公元年)，「衰，音咨，下七雷反」（『公羊傳』莊公元年），「齊，音咨，衰，七雷反」（『論語』子罕）。

58)『禮記』玉藻。注「齊當為楚薺之薺」釋文「采齊，依注作薺，疾私反，采薺，詩篇名」。

59)『儀禮』既夕禮。注「齊，翦也」釋文「齊，如字，又子淺反」。

60)『周禮』天官・食醫に「掌和王之六食、六飲、六膳、百羞、百醬、八珍之齊」，釋文に「之齊，才細反，下皆同，徐蔣細反」。天官・膳夫に「凡王之饋食用六穀，膳用六牲，飲用六清，羞用百二十品，珍用八物，醬用百有二十壺」。「分珍曰齊」は「八珍之齊」の誤りか。天官・亨人「掌共鼎鑊以給水火之齊」注に「齊，多少之量」釋文に「之齊，才細反，注同」，天官・瘍醫「掌腫瘍、潰瘍、金瘍。折瘍之祝藥劑殺之齊」釋文に「之齊，才細反」。

…」，去十二霽・霽（在詣切）小韻「齊，火齊似雲母，重沓而開，色黃赤似金，出日南，又齊和，又徂兮切」。

上平六脂・咨（即夷切）小韻「粢，祭飯，齋，上同」

上平十四皆・齋（側皆切）小韻「齋，齋潔也，亦莊也，敬也，經典通用齊也」

上十一霽・濟（子禮切）「濟，定也，止也，齊也，亦濟濟，多威儀兒，又水名，…，又姓，…，子禮切，又音霽」

去十二霽（子計切）「濟，渡也，定也，止也，又卦名，既濟，又子禮切」

『廣韻』は二音のみを載せるが、『音辨』辨字同音異は八音を列ねる。「如字」は「徂兮切」で、「側皆切」は「齋」に通じ、「才細切」は「在計切」、「在詣切」と同音で「劑」に通じ、「子奚切」は「躋」に通じ、「即夷切」は「齋」「齋」に通じ、「疾私切」は「薺」に通じ、「子淺切」は「翦」に通じる。辨字音清濁は『廣韻』にも記載のある二音を取り上げ、「等」字を用いて意味を関連づける。

(20) 箸

『音辨』卷二(12a)「箸，顯也（陟慮切），箸，置也（陟略切），箸，附也（直略切），箸，莢也（直慮切）」

『音辨』卷六(4b)辨字音清濁「箸，置也（陟略切），置定曰箸（直略切）」。

『廣韻』上平九魚・除（直魚切）「著，爾雅云，太歳在戊曰著雍，又直略、陟慮、陟略三切」，上八語・貯（丁呂切）小韻「著，著任，又張慮切，直略切」，去九御・著（陟慮切）小韻「著，明也，處也，立也，補也，成也，定也，陟慮切，又張略、長略二切」箸（上同），去九御・箸（遲倨切）小韻「箸，匙箸，筴，上同」，入十八藥・苟（張略切）小韻「著，服文於身，又直略、張豫二切」，入十八藥・著（直略切）小韻「著，附也」。

「如字」は御韻知母の「陟慮切」で「著名」「顯著」などの「著」である。その濁音「直慮切」（澄母御韻）は食物を挟む「はし」で「箸」に作る⁶¹⁾。藥韻の清音「陟略切」（知母）と濁音「直略切」（澄母）は『音辨』、『廣韻』の釋義からは、清音の方が「身に付ける」「着る」の意で濁音が「附著」の「著」で「くつつく」の意だと解釋できそうだが、『釋文』では濁音の反切に又音として清音を載せる例も多く、區別は明確でない。それでも、『音辨』卷六は藥韻の二音を取り上げ、共通の反切下字を用いて同韻であることを示し、「置」字を用いて二義の意味の共通性を示しながら釋し分けている。

61) 釋文では「箸」の注音は四箇所に見える。「如箸（直慮反）」（『周禮』夏官・大司馬、秋官序官「銜枚氏」）、「以箸，直慮反，說文云，飯敔也」「挾箸，直慮反」（いずれも『禮記』曲禮上）

(21) 冥

『音辨』卷三(5b)「冥，幽也（莫經切），冥，夜也（莫定切，詩嘖嘖其冥⁶²⁾），冥，縻取也（音暮，周官有冥氏⁶³⁾，掌攻猛獸，又莫經切）」。

『音辨』卷六(4b)辨字音清濁「冥，暗也（彌經切），暗甚曰冥（忙定切）」。

『廣韻』下平十五青・冥（莫經切）「冥，暗也，幽也，又姓，…」「暝，晦暝也」。

去四十六徑・𦣻（莫定切）小韻「暝，夕也」。

『廣韻』によれば、「暝」は「暗い」という意味なら平聲で「夕べ」の意なら去聲である。阮元本十三經の經文に「暝」はない。『廣韻』でも現代漢語でも「冥」には平聲一音(míng)しかないが、「冥」の派生義専用「暝」が用いられるようになったからだろう。『音辨』辨字同音異は二音のほか、『周禮』冥氏の音⁶⁴⁾を載せる。卷六辨字音清濁は平聲と去聲を取り上げ、「暗」を用いて二義の重なりを示す。

(22) 塵

『音辨』卷四(6b)「塵，土也（直珍切），塵，久也（田・陳二音），塵，土汚也（直吝切）」。

『音辨』卷六(5a)辨字音清濁「塵，土也（池珍切），土汚曰塵（直吝切，鄭康成曰，拜手坩塵⁶⁵⁾）」。

『廣韻』上平十七眞・陳（直珍切）小韻「塵，說文本作𡏗，鹿行揚土也」。

『廣韻』は「陳」と同音の「直珍切」一音しか載せない。『釋文』では音注が2箇所にあるが、一例⁶⁶⁾は古音では「陳」「塵」と「田」とが同音であったという注釋で、意味のよる読み分けに関わるものではない。もう1例は『音辨』の引く「直吝切」だが、これは「如字」の後に劉昌宗說として附されるもので、それから見る限り、「塵」に意味の違いによる読み分けがあったとは思えないが、『音辨』卷六辨字音清濁は「土」を用いて概念的意味の關連性を示しつつ四聲別義の例であるかのように記述する。

62) 小雅・斯干。傳「冥，幼也」箋「冥，夜也」釋文「其冥，毛莫形反，幼也，鄭莫定反，夜也」。

63) 秋官。釋文「冥氏，音覓」。

64) 『釋文』に「冥氏（莫歷反）」（『毛詩』小雅・大東），「冥氏，如字，又莫歷反」（『周禮』秋官）「冥氏（音覓）」（秋官・冥氏）。『周禮』秋官序官の「冥氏」注に「鄭司農云，冥讀為冥氏春秋之冥，玄謂冥方之冥，以繩縻取禽獸之名」。鄭衆說は「如字」，「莫歷反」「音覓」は鄭玄說である。なお，「𦣻（暮）」は「莫歷反」。

65) 『儀禮』燕禮「主人升，賓拜洗，主人賓右奠觚荅拜，降盥」注「主人復盥，為拜手坩塵也」釋文「塵，如字，劉直吝反」。

66) 『毛詩』豳風・東山「蜎蜎者蠋，烝在桑野」傳「烝，寘也」箋「古者聲寘填塵同也」釋文「寘填塵，依字皆是田音，又音珍，亦音塵，鄭云，古聲同，案陳完奔齊，以國為氏，而史記謂之田氏，是古田陳聲同」。

(23) 斂

『音辨』卷二(5a)「斂，收也（力檢切），斂，聚也（力驗切），斂孟，衛地也（音廉，春秋傳盟于斂孟⁶⁷⁾，又力檢切)」。

『音辨』卷六(5a)辨字音清濁「斂，收也（力檢切），收聚曰斂（力劒切，春秋傳晉靈公厚斂⁶⁸⁾」。

『廣韻』上五十琰・斂（良冉切）小韻「斂，收也，又姓，…，良冉切」，去五十五豔・殮（力驗切）小韻「斂，聚也」。

『音辨』辨字同音異は、『廣韻』の二音に加えて地名「斂孟」の「斂」の音を載せるが、辨字音清濁は『廣韻』の二音のみを載せる。

(24) 呼

『音辨』卷一(14a)「呼，外息也（火吾切），呼，大聲也（火故切），呼，發聲也（呼賀切，春秋傳，呼，役夫⁶⁹⁾），呼，拆也（火嫁切，鄭康成說，禮三兆之法，玉兆、瓦兆、原兆，其象似玉、瓦、原之疊呼，今本作罇⁷⁰⁾」。

『音辨』卷六(5a)辨字音清濁「呼，聲也（火吳切），大聲曰呼（火故切，禮城上不呼⁷¹⁾」。

『廣韻』上平十虞・呼（荒烏切）小韻「呼，喚也，說文曰，外息也，又姓，…，又虜複姓，…，荒烏切，又父故切」，去十一暮・諱（荒故切）「諱，號諱，亦作呼，荒故切，又火姑切」
去四十禡・嚇（呼訝切）小韻「罇，孔罇」。

去十一暮・諱（荒故切）「諱，號諱，亦作呼，荒故切，又火姑切」

『音辨』辨字同音異は、『廣韻』の二音のほか二音を載せるが、『釋文』の「呼」注音例39のうち「呼賀切」は『音辨』が挙げる『左傳』の例のみである⁷²⁾。また、『周禮』大卜の例は通行本『釋文』は「呼」でなく「罇」に作る。辨字同音異はその二音まで含め『釋文』で「呼」に附される音をすべて列べるが、卷六辨字音清濁は『廣韻』にも見える二音を取り上げ、共通の反切上字「火」（曉母）を用い、いずれも「聲」を用いて解釋している。

67) 『左傳』僖公二十八年傳。釋文「斂孟，徐音廉，又力檢反，…」

68) 『左傳』宣公二年傳「晉靈公不君，厚斂以彫牆」釋文「厚斂，力驗反」。また，昭公二十六年傳「公厚斂焉」釋文に「厚斂，力驗反」。

69) 『左傳』文公元年傳。注「呼，發聲也」釋文「曰呼，好賀反，發聲，注同」。校勘記「？？？」

70) 『周禮』春官・大卜「掌三兆之法，一曰玉兆，二曰瓦兆，三曰原兆」注「兆者，灼龜發於火，其形可占者，其象似玉、瓦、原之疊罇」。阮元校勘記に「釋文罇作呼」。通志堂經解本釋文「罇，劉火嫁反，又音呼坼之呼」

71) 『禮記』曲禮上。釋文「不呼，火故反，號咷也」。

72) 黃坤堯 1988 は反切下字の「賀」を「故」に改める。

(25) 將

『音辨』卷二(4a)「將, 領也 (子良切), 將, 帥也 (子匠切), 將, 請也 (七羊切, 詩將仲子⁷³⁾), 將, 牝羊也 (音牂⁷⁴⁾, 禮取羊若將⁷⁵⁾), 將, 雜也 (音陽, 禮伯用將⁷⁶⁾, 鄭衆讀, 又如字)」。

『音辨』卷六(5b)辨字音清濁「將, 持也 (即良切), 持衆者曰將 (即亮切)」。

『廣韻』下平十陽・將 (即良切) 小韻「將, 送也, 行也, 大也, 助也, 辭也, 又姓, …, 即良切, 又子諒切, 去四十一漾・醬 (子亮切) 小韻「將, 將帥」。

『廣韻』の二音 (精母陽韻、漾韻) と「七羊切」 (清母陽韻) は現代漢語の jiāng、jiàng、qiāng の區別と同じである。「音牂」は「將」を「牂」に讀ませる鄭玄注に據る音, 雑色の玉「將」は「如字」だが劉昌宗説が「音陽」である。『音辨』辨字同音異は『釋文』に見える「將」の音を網羅するが, 辨字音清濁は現代漢語の jiāng と jiàng の區別を取り上げ, 共通の反切上字「即」を用い, 釋義は「持」を用いて品詞變換型語形變化のように記述する。

(26) 援

『音辨』卷五(3a)「援, 引也 (于元切), 援, 助也 (于願切), 畔援, 跋扈也 (胡喚切, 詩無然畔援⁷⁷⁾, 又于元、于願二切)」。

『音辨』卷六(5b)辨字音清濁「援, 引也 (于元切), 引者曰援 (于眷切, 春秋傳國有外援⁷⁸⁾, 亦于万切)」。

『廣韻』上平二十二元・袁 (雨元切) 小韻「援, 援引也, 又爲眷切, 去三十三線・瑗 (干眷切) 小韻「援, 接援, 救助也, 亦姓」。

「胡喚切」は「畔援」を「畔換」に讀ませるもので⁷⁹⁾, 「援」の音ではない。平聲 (于母元韻) は「ひく、ひっぱる」, 去聲 (于母線韻) は「たすける」の意である。卷六辨字音清濁は, 共通して「引」を用いて二義を釋す。

73) 『毛詩』鄭風の篇名。傳に「將, 請也」釋文に「將仲子, 七羊反, 請也, 下及注皆同」。

74) 『廣韻』下平十一唐・臧 (則郎切) 小韻「牂, 牡羊」。

75) 『禮記』内則「炮取豚若將, 刳之刳之, …」注に「將當為牂, 牂, 牡羊也」釋文「若將, 依注音牂, 子郎反, 牝羊也」。

76) 『周禮』冬官考工記・玉人「天子用全, 上公用龍, 侯用瓚, 伯用將」注「鄭司農云, 全, 純色也, 龍當為彪, 彪謂雜色, 玄謂…龍、瓚、將皆雜名也」釋文「伯用將, 如字, 劉音陽」。

77) 『毛詩』大雅・皇矣。傳「無是畔道, 无是援取」箋「畔援猶拔扈也」釋文「畔援, 毛音袁, 取也, 又于願反, 鄭胡喚反, 畔援, 拔扈也, 韓詩云, 畔援, 武強也」。

78) 『左傳』昭公二十六年傳。釋文に音はない。

79) 陳喬樞『毛詩鄭箋改字説』三・皇兮 (續清經解 160) 參照。

(27) 中

『音辨』卷一(7b)「中，和也（陟弓切），中，適也（陟用切），中，伯仲也（持用切）」。

『音辨』卷六(6a)辨字音清濁「中，任也（陟弓切），任得宜曰中（陟仲切）」。

『廣韻』上平一東・中（陟弓切）小韻「中，平也，成也，宜也，堪也，任也，和也，半也，又姓，…，又漢複姓有七氏，…，陟弓切，又陟仲切」，去一送・中（陟仲切）小韻「中，當也，陟仲切，又陟冲切」

去一送・仲（直衆切）小韻「仲，中也，爾雅曰，中籥謂之仲，亦姓，…，直衆切」

「持用切」は「仲」に讀ませる音注で、『廣韻』の二音の音義關係は現代漢語の二音（zhōng、zhòng）と變わらない。卷六辨字音清濁は二義をともに「任」を用いて釋す。

(28) 間

『音辨』卷四(18a)「間，中也（古閑切），間，廁也（古覓切），間，隙也（胡姦切），昌間，魯地也（音簡，春秋傳大蒐于昌間⁸⁰⁾，又古閑切）」。

『音辨』卷六(6a)辨字音清濁「間，中也（古閑切），廁其中曰間（古覓切）」。

『廣韻』上平二十八山・間（古閑切）小韻「間，隙也，近也，又中間，亦姓，出何氏姓苑，古閑切，又閑、澗二音」，去三十一禡・禡（古覓切）小韻「間，廁也，瘳也，代也，送也，迭也，隔也，又音平聲」。

上平二十八山・閑（戸間切）小韻「閑，闌也，防也，禦也，大也，法也，習也，暇也，戸間切」

「胡姦切」は「閑」に通じる「間」の音，地名「昌間」は『左傳』『穀梁傳』釋文に見え，どちらも「如字」とするが，『穀梁傳』が一説として擧げるのが「音簡」である。『廣韻』にも見える二音は現代漢語の二音と音義の關係は變わらない。卷六辨字音清濁はその二義を共通に「中」を用いて釋す。

(29) 選

『音辨』卷一(18a)「選，數也⁸¹⁾（蘇管切），選，擇也（息亮切），選，任也（息戀切）」。

『音辨』卷六(6b)辨字音清濁「選，擇也（思亮切），謂擇曰選（思絹切）」。

80) 『左傳』昭公二十二年經。釋文「昌間，如字」。『穀梁傳』昭公二十二年。釋文「昌間，如字一音簡」。

81) 『尚書』盤庚上「世選爾勞」傳「選，數也，言我世世選汝功勤」。釋文に「選，息轉反，又蘇管反」。『毛詩』邶風・柏舟「威儀棣棣，不可選也」傳「物有其容，不可數也」釋文「選，雪亮反，數也」。『毛詩』小雅・車攻「選徒囂囂」傳「囂囂，聲也，維數車徒者為有聲也」「而選，宣亮反，數也，沈思戀反，下同」。『左傳』昭公元年傳「選，息轉反，徐素短反，注及下同，數也」

『廣韻』上二十八獮・選（思亮切）小韻「選，擇也，思亮切，又思絹切，又思管切」，去三十三線・選（息絹切）小韻「選，息絹切」。

『音辨』辨字同音異は『廣韻』にも見える二音のほかに「蘇管切」を挙げ「數也」と訓じるが、『釋文』では「數也」の「選」には「思亮切」と同音の反切が附される。「蘇管切」は『尚書』『左傳』釋文の又音で、『左傳』の音は徐邈説である。卷六辨字音清濁は『廣韻』の二音を取り上げ、動詞と名詞の品詞變換型語形變化であるかのように共通に「擇」を用いて釋す。

(30) 思

『音辨』卷四(9b)「思，容也（息茲切），思，慮也（息嗣切），思，頰也（塞來切，春秋傳于思于思⁸²⁾」。

『音辨』卷六(6b)辨字音清濁「思，慮度也（息茲切），慮謂之思（息吏切）」。

『廣韻』上平七之・思（息茲切）小韻「思，思念也，息茲切，又息吏切」，去七志・筭（相吏切）小韻「思，念也，又音司」。

「于思」は現代漢語でも yúsāi と讀むが，去聲音（sì）は現代漢語にはない。卷六辨字音清濁の釋義では平聲が動詞で去聲が名詞であるかのような印象を受けるが，『釋文』では平聲と去聲を併記する注も多く，讀み分けは明確ではない。

(31) 論

『音辨』卷一(21a)「論，議也（盧昆切），論，議言也（力悶切），論，理也（音倫，禮凡制五刑，必即天論⁸³⁾」。

『音辨』卷六(6b)辨字音清濁「論，說也（魯昆切），說言謂之論（魯困切）」。

『廣韻』上平十八諄・淪（力述切）「論，有言理，出字書，又盧昆切」，上平二十三魂・論（盧昆切）小韻「論，說也，議也，思也，盧昆切，又力旬、盧鈍二切」，去二十六慁・論（盧困切）小韻「論，議也，盧困切，又虜昆切」。

『音辨』辨字同音異は『廣韻』に見える三音をすべて列べる。「論」の音義については黄坤

82)『左傳』宣公二年傳。注「于思，多鬢之貌」釋文「于思于思，如字，又西才反，多鬢貌，賈逵云白頭貌」。

83)『禮記』王制。注「必即天論言與天意合，閔子曰，古之道不即人心，即或為則，論或為倫」釋文「天論，音倫，理也，注同」。

堯が詳しく論じている⁸⁴⁾。現代漢語では「論語」の「論」を除けば lùn に読まれる⁸⁵⁾が、『釋文』で音が附されるのは「倫」に読む「論」⁸⁶⁾以外はほとんど去聲⁸⁷⁾で、平聲(「盧昆切」)の方が「如字」である。『音辨』辨字同音異は三音をすべて列ねるが、辨字音清濁は魂韻と恩韻の二音を取り上げ、共通に「説」字を用いて解釋する。Downer 1959, 周法高 1962 はいずれも辨字音清濁の記述を平聲を動詞、去聲を名詞と解釋するものとする。

(32) 喜

『音辨』卷二(14a)「喜，樂也(虚里切)，喜，心所悦也(虚記切⁸⁸⁾，易六五之吉，有喜也⁸⁹⁾，徐邈讀)，未喜，桀后也(音嬉，春秋傳夏以未喜⁹⁰⁾)，喜，酒食也(音饔，詩田畯至喜⁹¹⁾)」。

『音辨』卷六(7a)辨字音清濁「喜，悦也(虚己切)，情所悦謂之喜(虚記切)」

『廣韻』上六止・喜(虚里切)小韻「喜，喜樂，又聞喜縣，…，禮記曰，人喜則斯陶陶斯咏，虚里切，又香忌切」

上平七之・僖(許其切)小韻「嬉，美也，一曰游也」。

去七志・熾(昌志八)小韻「饔，方言云，熟食也，説文云，酒食也」，熹(許紀切)小韻「熹，好也」「嬉，可嬉美姿顔也，又音熙」。

「喜」は使用頻度の高い文字であるにも関わらず、『釋文』で音が附される「喜」は8例のみ

84) 黄坤堯 1997 所収の「《釋文》“論”字音義辨析」参照。

85) 「倫」に読むという。『釋文』では「名曰論語，論，如字，綸也，輪也，理也，次也，撰也，蒼述曰語，撰次孔子弟子及時人之語也，鄭玄云，仲弓、子游、子夏等撰」(『論語』序)，「論語，上如字，又音倫」(『尚書』序)など「如字」で又説として「音倫」がみえる。ただ，「如字」は平聲なので，いずれにしる現代漢語では lún になる。

86) 「經論，音倫，鄭如字，謂論撰書禮樂施政事，黃穎云經論，匡濟也，本亦作綸」(『周易』屯)，「論語，上如字，又音倫」(『尚書』序)，「於論，…，論，音盧門反，思也，一云，鄭音倫，下同」(『毛詩』大雅・靈臺)，「天論，音倫，理也，注同」(『禮記』王制)，「能經論，本又作綸，同，音倫」(『禮記』中庸)。

87) 「論難，魯困反，…」(『毛詩』大雅・公劉)，「聲論，魯困反」(卷阿)，「其論，魯頓反，下同，又如字」(『周禮』夏官・司士)，「其論，如字，舊力困反」(『禮記』王制)，「論説，力門反，徐力頓反，注同」(文王世子)，「通論，力頓反」(『左傳』序)，「之論，盧困反，下持論同」(『公羊傳』序)，「之論，力困反」(『穀梁傳』序)，「齊物論，力頓反，李如字」(『莊子』齊物論)，「高論，力困反」(刻意)，「論之，力困反」(秋水)，「論則，力頓反」(盜跖)，「論者，力困反」(天下)。

88) ただし，『廣韻』に見える「嬉」の二音のうち一音は「虚記切」と同音。

89) 『周易』賁。釋文「有喜，如字，徐許意反，无妄、大畜卦放此」。また，『周易』蹇「九三，往蹇，來反」象辭「往蹇來反，内喜之也」釋文に「内喜，如字，徐許意反，猶好也」。

90) 『左傳』昭公二十八年傳「且三代之亡、共子之廢皆是物也」注「夏以妹喜，殷以妲己，周以褒姒，三代所由亡也」釋文「未喜，本或作嬉，音同，國語云，桀伐有施，有施氏以妹喜女焉，韋昭注漢書云，嬉姓也」。

91) 幽風・七月、小雅・甫田、大田。

である。そのうち5例はまず「如字」とするもので、残りの3例のうち1例⁹²⁾は「末喜」の「喜」で「嬉」に讀むもの、2例⁹³⁾は去聲の音のみが附され、「このむ」という意味の動詞である。「如字」5例のうち、2例⁹⁴⁾は「饔」に讀む鄭玄説を、3例⁹⁵⁾は徐邈説（去聲音）をも載せる。『音辨』辨字同音異はそれらの四音をすべて列べるが、辨字音清濁は「如字」の「虚里切」（虚已切）とその去聲音（虚記切）を取り上げ、いずれも「悦」を用いて解釋する。

(33) 操

『音辨』卷五(6a)「操，持也（七刀切），操，志也（七誥切），操，鄭邑也（七南切，春秋傳鄭伯髡原卒于操⁹⁶⁾」。

『音辨』卷六(7a)辨字音清濁「操，持之也（七刀切），志有所持謂之操（七到切）」。

『廣韻』下平六豪・操（七刀切）小韻「操，操持，七刀切，又七到切」，去三十七号・操（七到切）小韻「操，持也，又志操，七到切，又七刀切」。

『音辨』辨字同音異は春秋に見える地名の「操」を「七南切」とするが、『釋文』で三度注音される地名の「操」には「七報反」という「七誥切」「七到切」と同音の反切が附され、「七南反」はその中の1例のみに又音として見える反切である。また、『釋文』では去聲の反切が附されるのは43例のうち地名の「操」3例を除けば1例⁹⁷⁾のみである。「七刀切」と「七到切」は『廣韻』にも見えるが、意味の區別は明確ではない。『音辨』卷六辨字音清濁は『廣韻』の二音を取り上げ、品詞變換型語形變化であるかのように釋す。

(34) 吹

『音辨』卷一(14a)「吹，嘘也（昌垂切），吹，聲也（尺偽切）」

92) 『左傳』昭公二十八年傳釋文に「末喜，本或作嬉，音同，國語云，桀伐有施，有施氏以末喜女焉，韋昭注漢書云，嬉，姓也」。

93) 『莊子』説劍「昔趙文王喜劍」釋文「喜劍，許紀反，下同」，『爾雅』釋蟲「蟻齧桑」注「喜齧桑樹」釋文「喜，虚記反，下同」。

94) いずれも『毛詩』の釋文。「至喜，王申毛如字，鄭作饔，尺志反，酒食也，下同」（幽風・七月），「至喜，毛如字，鄭爲饔，饔，酒食也，尺志反，下篇同」（小雅・甫田）。

95) 『周易』賁「象曰，六五之吉，有喜也」釋文に「有喜，如字，徐許意反，无妄、大畜卦放此」，『周易』蹇「象曰，往蹇來反，內喜之也」釋文に「內喜，如字，徐許意反，猶好也」，『莊子』讓王「昔者神農之有天下也，時祀盡敬而不祈喜，其人於也…」釋文に「祈喜，如字，徐許記反」。

96) 襄公七年經。『左傳』は「操」を「鄴」に作る。『公羊傳』釋文「于操，七報反，一音七南反，左氏作鄴」，『穀梁傳』釋文「于操，七報反」。また、『穀梁傳』宣公九年注「案襄七年，鄭伯卒于操」釋文に「于操，七報反」。

97) 『尚書』伊訓「以至于有萬邦，茲惟艱哉」偽孔傳「言湯操心常危懼動而無過，以至為天子，此自立之難」釋文「操，七曹反，又七報反」。

『音辨』卷六(7b)辨字音清濁「吹，响也（昌垂切），謂响氣曰吹（尺僞切）」

『廣韻』上平五支・吹（昌垂切）小韻「吹，吹嘘，昌垂切，又尺僞切」，去五寘・吹（尺僞切）小韻「吹，鼓吹也，月令曰，命樂正習吹，尺僞切，又尺爲切」。

『廣韻』、『音辨』辨字同音異、辨字音清濁いずれも、穿母支韻と穿母寘韻の二音を挙げる。『釋文』で音が附される「吹」は異體字の「𪗇」も含めれば7例⁹⁸⁾あるが、そのうち、去聲の反切のみが注されるのはすべて吹奏樂器を演奏するという意味の「吹」である。卷六辨字音清濁は釋義に共通して「响」を用いる。

(35) 編

『音辨』卷五(9b)「編，次也（補年切），編，首服也（步典切，鄭康成說，禮編列髮爲之，如假紒⁹⁹⁾，又必先切）」。

『音辨』卷六(8a)辨字音清濁「編，次也（補年切），謂所次列曰編（步典切）」。

『廣韻』下平一先・邊（布玄切）小韻「編，次也，又方法切」，下平二仙・鞭（卑連切）小韻「編，次也，又布干、方典二切」，上二十七銑・編（方典切）小韻「編，編綯，方典切，一曰次第也，又卑連切」。

上二十七銑・辮（薄沓切）「說文，交也」

『音辨』辨字同音異は、『廣韻』の三音のうち「如字」の「補年切」（「布玄切」）のみを載せる。「步典切」は「辮」の音で、『釋文』では「編髮」の「編」に附く¹⁰⁰⁾。また、「あむ」という意味の動詞として用いられる「編」に又音として同じ上聲の反切が附く例¹⁰¹⁾がある。卷六辨字音清濁は、この二音を名詞・動詞品詞變換型語形變化と解釋する。

98)『周禮』春官・笙師「笙師掌教𪗇竽」釋文「𪗇，昌垂反」，『禮記』月令「季秋之月，…，上丁，命樂正，入學習吹」釋文「習吹，昌睡反，注同」，「季冬之月，…，命樂師大合吹而罷」釋文「吹，昌睡反」，『爾雅』釋樂「徒吹謂之和」釋文「徒吹，本或作𪗇，字同，昌睡反」。以上は樂器を吹くという意味で用いられる「吹」。その他、3例はいずれも『莊子』の釋文。「相吹，如字，崔本作炊」（逍遙遊），「吹也，如字，又叱瑞反，崔云，吹猶簫也」（齊物論），「吹，如字，又昌僞反，字亦作炊」（駢拇）。

99)『周禮』天官・追師「掌王后之首服，為副編次追衡笄，…」注「編，編列髮為之，其遺象若今假紒矣」釋文「編，步典反，又必先反，注同」。

100)『音辨』の挙げる『周禮』追師の釋文のほかに、『毛詩』鄘風・君子偕老「君子偕老，副笄六珈」傳「副者后夫人之首飾，編髮為之」釋文に「編，蒲典反，或必先反」。

101)『論語』公冶長「道不行乘桴」集解「馬曰，桴，編竹木，大者曰棧，小者曰桴」釋文に「編竹，必縣反，又蒲典反」，また『爾雅』釋樂「大簫謂之言」注「編二十三管，長尺四寸」釋文に「編，卑縣反，又方千反，或音步典反」。

(36) 封

『音辨』卷五(14a)「封，與爵土也（甫容切），封，所受爵土也（甫用切），封，下棺也（音窆，禮縣官而封¹⁰²⁾，又補鄧切)」。

『音辨』卷六(8a)辨字音清濁「封，授爵土也（甫容切），謂所受爵土曰封（甫用切，書封即乃封¹⁰³⁾」。

『廣韻』上平三鍾・封（府容切）小韻「封，大也，國也，厚也，爵也，亦姓，…」，去三用・葑（方用切）小韻「封，又方容切」。

去五十五豔・窆（方驗切）小韻「窆，下棺，方驗切，又方亘切二」。

『釋文』で音が附される「封」13例のうち，11例¹⁰⁴⁾までは「窆」に讀まれるもので，残り2例¹⁰⁵⁾も「如字」と去聲音が併記されており，「封」は封建された封地の意で用いられている。『音辨』辨字同音異は例によって「窆」の音も載せるが，卷六辨字音清濁は「音窆」以外の二音を取り上げ，平聲が動詞，去聲が名詞という品詞變換型語形變化があるかの如く釋す。

(37) 載

『音辨』卷五(18a)「載，乗也，事也（作代切），載，年也（資乃切，又作代切），載，運也（昨代切，書臬厥載¹⁰⁶⁾），載，發土也（側基切，詩倣載南畝¹⁰⁷⁾，鄭康成讀)」。

『音辨』卷六(8a)辨字音清濁「載，舟車以致物也（作代切），謂所致物曰載（昨代切，書臬厥載)」。

『廣韻』上十五海・宰（作亥切）小韻「載，年也，出方言，又音再」，去十九代・載（作代切）小韻「載，年也，事也，則也，乗也，始也，盟辭也，又姓，風俗通云，姬姓之後，作代切，又

102) 『禮記』檀弓上に「縣棺而封」。注「封當為窆，窆，下棺也，春秋傳作塋」釋文「而封，依注作窆，彼驗反，下棺也，徐又甫鄧反」。

103) 蔡仲之命に「往即乃封」。傳「往就汝所封之國」。釋文「封，如字，徐音甫用反」。

104) 「謂封，彼驗反」（『周禮』地官・鄉師），「之封，彼驗反，或如字」（地官・遂人），「既封，彼驗反，劉通鄧反」（『儀禮』士虞禮），「而封，依注作窆，彼驗反，下棺也，徐又甫鄧反」（『禮記』檀弓上），「既封，依注音窆，彼驗反，下同」，「機封，彼驗反」，「其封，彼劒反，出注」（檀弓下），「縣封，…，下音窆，彼驗反」（王制），「既封，依注音窆，彼驗反」（曾子問），「既封，彼驗反，又如字」（雜記下），「凡封，依注作窆，彼驗反，下及注機封同」（喪大記）。

105) 『尚書』蔡仲之命釋文「封，如字，徐音甫用反」については注 103 参照。『論語』學而「道千乗之國」集解「唯公侯之封乃能容之」釋文「之封，甫用反，又如字」。

106) 盤庚中「若乗舟汝弗濟，臬厥載」傳「臬敗其所載物」釋文「載，如字，又在代反」。

107) 小雅・大田，周頌・載芣，良耜。大田箋に「倣讀為熾，載讀為苗粟之苗，時至，民以其利耜熾苗發所受之地，趨農急也，田一歲曰苗」，釋文に「倣載，衆家並如字，倣音尺叔反，始也，載，事也，鄭讀為熾苗，熾音尺志反，苗音緇」，「栗音列，鄭注周禮云，讀如裂繻之裂」。載芣箋に「倣載當作熾苗」，釋文に「倣載，毛並如字，鄭作熾苗，下篇同」。良耜箋に「耜熾苗是南畝也」，釋文に音はない。

材代切」，去十九代・載（昨代切）小韻「載，運也」。

『釋文』で音が附される「載」18例のうち、8例¹⁰⁸⁾は「音戴」，4例¹⁰⁹⁾は「如字」，2例¹¹⁰⁾は「裁（災）」に讀ませるもの，2例¹¹¹⁾は車の積荷の意の「昨代切」の「載」，2例¹¹²⁾は國名の「載」である。「年」の意の「載」は『釋文』では3箇所¹¹³⁾に注があるが，音は附かない。『音辨』卷六辨字音清濁は代韻の精母と從母の二音を取り上げ，「致物」を共通に用い，それぞれ「運輸する」「運輸される積荷」の意味だと解釋している。

(38) 藏

『音辨』卷一(9b)「藏，入也（昨郎切），藏，物之府也（才浪切），藏，善也（音臧，詩中心藏之，鄭康成讀¹¹⁴⁾）」。

『音辨』卷六(8a)辨字音清濁「藏，入也（徂郎切），謂物所入曰藏（徂浪切）」。

『廣韻』下平十一唐・藏（昨郎切）小韻「藏，隱也，匿也，昨郎切，又徂浪切」，去四十二宕・藏（徂浪切）小韻「藏，通俗文曰，庫藏曰帑，徂浪切，又徂郎切」。

下平十一唐・臧（則郎切）小韻「臧，善也，厚也，又姓，…」

『廣韻』の二音（平聲、去聲）の音義關係は現代漢語の二音（cáng, zàng）と変わらない。『音辨』辨字同音異は二音のほか，「臧」に讀む「音臧」も載せる。卷六辨字音清濁は『廣韻』の

108) 「則載，音戴，本亦作戴，下及注同」（『禮記』曲禮上）「載青，音戴，後放此」，「載，丁代反，又如字，注同」（月令），「載，丁代反，本亦作戴」（郊特牲），「載，音戴」，「載以，音戴」（明堂位），「載仁，音戴，本亦作戴」（儒行），「載，丁代反，本今作戴」（『爾雅』釋訓）。

109) 「載，如字，載，載於書也，馬同鄭韋昭云載事也」（『尚書』禹貢），「載，如字，又音戴，同」（『毛詩』周頌・絲衣），「載周，如字，詩作哉，毛云，哉，載也，鄭云，始也」（『左傳』昭公十年傳），「負載，如字，謂載書，或音戴」（哀公八年傳）。

110) いずれも『禮記』中庸の釋文。「初載之載，並音災，本或作哉，同」，「之載，依注讀曰裁，音災，生也，詩音再」。

111) 「載，如字，又在代反」（『尚書』盤庚中），「爾載，才冉反，注及下同」（『毛詩』小雅・正月）。

112) 『左傳』隱公十年經の釋文では「音再」だが，『穀梁傳』隱公十年の釋文では「如字」。

113) 「十有三載，馬鄭本作年」（『尚書』禹貢），「載祀，杜云，皆年也，爾雅云，商曰祀，唐虞曰載，周曰年，夏曰歲」（『左傳』宣公三年傳），「載，堯典云，朕在位七十載」（『爾雅』釋天）。

114) 小雅・隰桑。箋「藏，善也」釋文は「藏」を「臧」に作り，「臧之，鄭子郎反，善也，王才郎反」。阮元校勘記に「中心藏之，小字本、相臺本同，唐石經初刻同，後磨，改藏作臧，案釋文云，臧之，鄭子郎反，善也，王才郎反，是唐石經依鄭義磨改。羣經音辨艸部云，藏，善也，鄭康成讀，宋時釋文舊本新本不同，賈所見本，字或作藏，故云然，考鄭訓善，自當不從艸，而藏字在說文新附，即王義亦未必不仍，為臧有艸者非也，考文古本作臧，采釋文」。『音辨』が「藏」に作るのは宋の『釋文』ではテキストに異同があり，賈昌朝は「藏」に作るテキストを見たのだらうとする。

二音について、共通の反切上字を用い、ともに「入」を用いて釋す。

(39) 卷

『音辨』卷一(23a)「卷，斂也（居苑切），卷，束名也（居戀切），卷，冠武也¹¹⁵⁾（起權切），卷，祭服也（音袞，禮三公一命卷¹¹⁶⁾），卷然，手容也（音拳，禮執女手之卷然¹¹⁷⁾），卷，髮起也（其言切，詩匪伊卷之，髮則有餘，沈重讀¹¹⁸⁾），卷遯，行謹也（去阮切，鄭康成說，禮再三舉足，謂志趨卷遯而行也¹¹⁹⁾）」。

『音辨』卷六(8b)辨字音清濁「卷，曲也（居兗切），謂曲者曰卷（居戀切）」。

『廣韻』下平二仙・權（巨員切）小韻「卷，曲也，又九免、九院二切」，上二十阮・卷（求晚切）小韻「卷，風俗傳云，陳留太守琅邪徐焉改園姓卷氏，字異音同」，上二十八獮・卷（居轉切）小韻「卷，卷舒，說文曰，膝曲也，居轉切」，去三十三線・眷（居倦切）小韻「眷，曲也，又書眷，今作卷，卷，上同」。

『廣韻』の「巨員切」は「音拳」と、「居轉切」は「居苑切」「居兗切」と、「居倦切」は「居戀切」と同音だが、「求晚切」に当たる音は『音辨』に見えない。また、『音辨』の「起權切」、「音袞」、「其言切」、「去阮切」は『廣韻』には見えないが、『釋文』に根據がある。『音辨』辨字同音異は『釋文』の「卷」の音をすべて載せる。卷六辨字音清濁は現代漢語にも區別が残る二音を取り上げ、いずれも「曲」を用いて釋す。

(40) 祝

『音辨』卷一(7a)「祝，主贊詞者也（之六切），祝，贊詞也（之又切），祝，箸也（之樹切，禮瘍醫掌折瘍之祝藥，鄭康成曰，謂附著藥也¹²⁰⁾）」。

115)『禮記』玉藻「綈冠玄武，子姓之冠也」注「武，冠卷也，古者冠卷殊」釋文「冠卷，起權反，下同，喪大記「弔者襲裘，加武，帶，經，與主人拾踊」注「武，古冠之卷也，加武者，明不改冠，亦不免也」釋文「之卷，起權反」，「卷者，音權，又起權反」（『左傳』襄公十四年傳）

116)『禮記』王制「制，三公一命卷」注「卷俗讀也，其通則曰袞」釋文「命卷，依注音袞，古本反」。

117)『禮記』檀弓下。釋文「之卷，音權，本又作拳」。

118)小雅・都人士。箋「女非故卷此髮也，髮於礼自當有旗也」，釋文「卷髮，音權，注及下同」。小雅・采芣「予髮曲局，薄言歸沐」傳「局，卷也」箋「礼婦人在夫家笄象笄，今曲卷其髮，憂思之甚也」釋文「卷也，音權，下同，又眷勉反，沈其言反」。『音辨』が引くのは都人士だが，「沈其言反」は采芣の釋文。

119)『儀禮』聘禮「再三舉足，又趨」注「再三舉足，自安定乃復趨也，至此云舉足（校勘記：徐本，集釋俱無至字，通解有，按疏，有至字無云字），則志趨卷遯而行也（校勘記：徐本同，毛本遯作豚，釋文亦然，張氏從之），…」釋文「卷，去阮反」。

120)『周禮』天官・瘍醫「掌腫瘍、潰瘍、金瘍、折瘍之祝藥劑殺之齊」，注「祝當為注，讀如注病之注，聲之誤也，注謂附著藥」釋文「之祝，之樹反，出注」。

『音辨』卷六(8b)辨字音清濁「祝，祭主贊詞者也（之六切），謂贊詞曰祝（之又切，禮有六祝¹²¹⁾」。

『廣韻』去四十九宥・呪（職救切）小韻「祝，說文曰，祭王贊詞，又音粥，入一屋・粥（之六切）「祝，巫祝，又太祝令，官名，周禮曰，太祝掌…，亦音呪，又姓，…」。

『音辨』辨字同音異は『廣韻』の二音に加えて，「注」に讀む「祝」を載せる。卷六辨字音清濁は『廣韻』の二音を取り上げる。去聲は「祝詞」，入聲は「祝詞をつかさどる者」である。

(41) 平

『音辨』卷二(13b)「平，均也（蒲兵切），平平，辯治也（婢延切，詩平平左右¹²²⁾），平，使也（補耕，普耕二切，書平來以¹²³⁾」。

『音辨』卷六(9a)辨字音清濁「平，均也（蒲兵切），品物定法曰平（蒲柄切，鄭康成說，禮質劑，今時月平¹²⁴⁾」。

『廣韻』下平・便（房連切）小韻「平，書傳云，平平，辯治也，又皮明切」，下平十二庚・平（符兵切）小韻「平，正也，和也，易也，亦州名，…，又姓，…，又漢複姓，」「評，評量，亦評事，大理寺官，唐初置十二員，又音病」。

下平十三耕・忸（普耕切）小韻「忸，使人」

去四十三映・病（皮命切）小韻「評，平言，又音平」

『釋文』で音が附く「平」7例のうち，2例は「辯治也」（よくおさまる意）の「平平」¹²⁵⁾，1

121) 『周禮』大祝に「大祝小六祝之辭，以事鬼神示，祈福祥，求永貞，一曰順祝，二曰年祝，三曰吉祝，四曰化祝，五曰瑞祝，六曰筮祝」。釋文「六祝，之秀反，後除大祝、宗祝諸官皆同，以意求之」。

122) 小雅・采芣。傳「平平，辯治也」。釋文「平平，婢延反，辯治也，韓詩作便便，云閑雅之貌」。

123) 洛誥。阮元本、『釋文』は「平」を「忸」に作る。釋文「忸，普耕反，徐敷耕反，又甫耕反，下同」。阮元校勘記は、『羣經音辨』が洛誥を引いて「平」に作ることを指摘している。また、『毛詩』召南・何彼襉矣疏が洛誥を引いて「平」に作るが，その阮元校勘記に「各本注疏及尚書，平皆作忸，案羣經音辨引洛誥平來以圖，正作平字，唐石經作忸，衛包所改，今本釋文作忸，陳鄂所改，集韻併使也，或作忸，古作平，芣，尚書平秩，馬融本作芣，曰使也，周禮春官車僕芣車，故書作平，十行本蓋出于善本，故此猶存其古」。古くは「平」に作ったとするが，當時，既に『音辨』以外，「平」に作る本がなかったことがわかる。

124) 『周禮』天官・小宰「以官府之八成經邦治，…，七曰聽賣買以質劑，…」注。「質劑謂市中平質，今時月平，是也」，釋文「月平，劉音病」。

125) 『尚書』洪範「王道平平」偽孔傳「言辯治」釋文「平，婢縣反」，『毛詩』小雅・采芣については注122 参照。

例¹²⁶⁾は「如字」だが馬は「使也」の「𠂔」に讀む「平」、残りの4例¹²⁷⁾は「評」に讀む「平」である。『音辨』 辨字同音異は去聲の音を除きすべて列べる。卷六辨字音清濁は、「如字」と辨字同音異が取り上げなかった去聲音、つまり聲調（平、去）のみ異なる二音を取り上げる。

(42) 累

『音辨』 卷五(12a)「累，重也（力軌切），累，牽也（力僞切），肥累，狄地也（力輒切，杜預說，春秋傳鉅鹿下曲陽縣西有肥累城¹²⁸⁾），累，繫也（力迫切，禮季春，乃合累牛騰馬，游牝於牧¹²⁹⁾，鄭康成讀）」

『音辨』 卷六(9b)辨字音清濁「累，連也（力水切），牽連爲敗曰累（力僞切）」

(参考)

『音辨』 卷五「𦰩，増也（力軌切），𦰩，連也（力僞切，書𦰩大德¹³⁰⁾）」。

『廣韻』 上平六脂・漂（力迫切）小韻「𦰩，𦰩索也，亦作縲，又姓，…」，上四紙・𦰩（力委切）小韻「𦰩，說文曰，増也，十黍之重也，累，上同，又良僞切」，去五寘・累（良僞切）小韻「累，縁坐也」，去六至・𦰩（力遂切）小韻「𦰩，係也」。

『音辨』 辨字同音異は『廣韻』に見えない地名「累」の音「力輒切」を載せるが、その他の三音の音義は概ね¹³¹⁾『廣韻』と合う。卷六辨字音清濁は、上聲の「累積」「累日」など「かさねる」の意の「累」と去聲の「連累」「累身」など「わずらわす」「まきぞえにする」の意の「累」を取り上げ、「連」を用いて二義を関連づける。

(43) 與

『音辨』 卷一(23b)「與，授也（以呂切），與，及也（余倨切），與，辭也（羊諸切）」。

『音辨』 卷六(9b)辨字音清濁「與，授也（羊主切），授而共之曰與（余慮切）」。

『廣韻』 上平九魚・余（以諸切）「𡗗，說文云，安气也，又語末之辭，亦作與，與，上同，本又餘佇切」，上八語・與（余呂切）小韻「與，善也，待也，說文曰，黨與也，余呂切，又余、

126) 洛誥の釋文（注 123 参照）は「𠂔」に作るが、堯典「寅賓出日，平秩東作」偽孔傳「寅敬賓導秩序也，歲起於東，而始就耕，謂之東作，東方之官敬導出日，平均次序東作之事以務農也」釋文に「平，如字，馬作𠂔，普庚反，云使也，下皆放此」。

127) 「之平，音評」（『周禮』天官・大宰），「月平，劉音病」（天官・小宰），「月平，皮命反，下月平同」（地官・司市），「正平，皮命反」（『禮記』王制）。

128) 『左傳』昭公十二年「秋八月壬午，減肥，…」注。釋文「肥累，劣彼反，又力輒反」。

129) 『禮記』月令。注「累，騰皆乘匹之名，釋文「累牛，力迫反，注同」。

130) 『尚書』旅獒。釋文「累，劣僞反」。

131) 「力軌切」は旨韻「力委切」は紙韻。

譽二音，与，上同」，去九御・豫（羊洳切）小韻「與，參與也」。

『廣韻』、『音辨』辨字同音異の上聲、去聲、平聲の三音の音義關係は、現代漢語の yú、yǔ、yù と変わらない。『音辨』卷六辨字音清濁は上聲（あたえる、ともに）と去聲（参与する、あずかる）の二音を取り上げ、「授」を用いて二義を関連づける。

(44) 比

『音辨』卷三(14b)「比，密也（毗至切），比，方也（必以切），比，和也（蒲之切），比，次也（蒲必切），比，朋也（必一切）」。

『音辨』卷六(9b)辨字音清濁「比，近也（卑履切），近而親之曰比（毗志切）」。

『廣韻』上平六脂・毗（房脂切）小韻「比，和也，並也，又匕、鼻、邨三音」，上五旨・匕（卑履切）小韻「比，校也，並也，…，又毗、鼻、邨三音」，去六至・鼻（毗至切）小韻「比，近也，又阿黨也，又房脂、必履、扶必三切」，去六至・痹（必至切）小韻「比，近也，併也」，入五質・邨（毗必切）「比，比次，又毗、毗、鼻三音」。

『廣韻』『音辨』辨字同音異は、平聲¹³²⁾を「和也」，上聲¹³³⁾を「校也」「方也」(くらべる)，去聲を「密也」「近也」(ちかい)，入聲(並母質韻)を「次也」と解釋する。『釋文』の「比」に附く反切の大半は去聲で次に上聲が多く平聲も見えるが，入聲はない。卷六辨字音清濁は上聲と去聲を取り上げ，いずれも「近」字を用いて釋すが，釋義が『廣韻』、辨字同音異と食い違う。

(45) 難

『音辨』卷二(7a)「難，艱也（奴干切），難，郤也（乃多切，禮季冬始難毆疫¹³⁴⁾」。

『音辨』卷六(9b)辨字音清濁「難，艱也（乃干切），動而有所艱曰難（乃旦切）」。

『廣韻』上平二十五寒・難（那干切）小韻「難，艱也，不易稱也，又木難，珠名，…，又姓，…，那干切，又奴肝切」，去二十八翰・攤（他丹切）小韻「難，患也，又奴丹切」。
下平七歌・那（諾何切）小韻「儼，驅疫」

『廣韻』の平聲、去聲の二音の音義關係は現代漢語の nán、nàn と同じである。『音辨』辨字

132) 毗至切は至韻，房脂切は脂韻，いずれも並母。

133) 必以切は止韻，卑履切は旨韻，いずれも幫母。

134) 『周禮』春官・占夢。注「故書難或為儼，杜子春難讀為難問之難，其字當作難」，釋文「始難，戚乃多反，劉依杜乃旦反，注以意求之，儼字亦同」。

同音異は平聲と「儺」に讀む「難」の「乃多切」の二音のみを載せ、卷六辨字音清濁は、『廣韻』の二音を取り上げ、「艱」を用いて二義を關連づける。

(46) 屬

『音辨』卷三(17a)「屬，類也（市玉切），屬，連也（之欲切），屬，甲札之數也（之樹切，鄭康成說，禮犀甲七屬，謂上於下旅札續之數¹³⁵⁾）」

『音辨』卷六(10a)辨字音聲濁「屬，聯也（章玉切），聯而有所係曰屬（時玉切）」

『廣韻』入三燭（之欲切）屬「付也，足也，會也，官衆也，儕等也，經典作屬，又音蜀」，蜀（市玉切）小韻「屬，附也，類也，又音燭」

「辨字同音異」の「類也」（市玉切），「連也」（之欲切）の區別は現代語の shǔ と zhǔ の読み分けと変わらない。「之樹切」という反切は、『釋文』では『音辨』が擧げる函人の例だけでなく、匠人の「水屬」の「屬」にも附される¹³⁶⁾が、そこでも「讀爲注」と斷わられているように、いずれも鄭注が「注」に讀む「屬」¹³⁷⁾である。つまり、「之樹切」は「屬」の異讀ではなく、「注」の音¹³⁸⁾なのである。そのほか、『毛詩』小雅・角弓の「屬」に「音蜀，注同，讀者亦音樹」という釋文が附されているが、最初に「音蜀」とした上で「讀者亦」とすることからも「音樹」は「屬」の異讀ではなく、「屬」が韻字であることによる読みぐせの問題だと考えられる。「辨字同音異」が『釋文』の注音状況を忠實に述べているのに對し、『音辨』卷六「辨字音聲濁」は現代語にも反映される「屬」本來の異讀のみを取り上げているが、いずれの義釋にも共通して「聯」を用い、同じ反切下字を用いる。

(47) 亨

『音辨』卷二(16b)「亨，嘉之會也（許庚切），亨，淪也（普庚切，禮內饗掌割亨¹³⁹⁾，又普孟切），亨，獻也（許兩切）」。

『音辨』卷六(10a)辨字音聲濁「亨，獻也（呼兩切），神受其獻曰亨（呼亮切）」。

『廣韻』下平十二庚・腍（許庚切）小韻「亨，通也，或作𡙇，又匹庚，許兩二切」，𡙇（撫庚切）小韻「亨，𡙇也，俗作烹，又許庚，許兩二切」，上三十六養・響（許兩切）小韻「𡙇，獻也，

135)『周禮』冬官考工記・函人「為甲，犀甲七屬，兕甲六屬，合甲五屬」鄭注「屬讀如灌注之注，謂上旅下旅札續之數也，…」釋文「屬，之樹反，下及注同」。

136)「凡溝逆地防，謂之不行，水屬不理孫，謂之不行」注に「屬讀為注」

137) 函人注「屬讀如灌注之注」，匠人注「屬讀為注」。

138)『廣韻』去十遇・注（之戌切）小韻「注，灌注也，又注記也」。

139)『周禮』天官・內饗「凡宗廟之祭祀掌割亨之事」。

祭也，臨也，向也，歆也，書傳云奉上謂之亨，亨，上同，亦作享」。

現代語では、「許庚切」(hēng)は「亨」，「普庚切」(pēng)は「烹」，「許兩切」(xiǎng)は「享」と書き分けられているが、『廣韻』の項目には「亨」しか取り上げられず「享」は或體字，「烹」などは俗字扱いである。阮元本十三經注疏の用字法を見ても，經文で「烹」が用いられるのは、『左傳』昭公二十年傳、哀公十六年傳、『孟子』萬章上の10例程度に過ぎない。そのためか，「烹」が「亨」(hēng)、「享」(xiǎng)と通用することではなく，常に「煮る」の義の「烹」(pēng)専用字であり，『釋文』も「烹」については現代語のpēngに當る反切しか載せない¹⁴⁰⁾。「亨」，「享」については少し事情が異なる。「亨」に現代語のhēngに當る反切(許庚反)の他にxiǎng(許兩反、香兩反)やpēng(普庚反、普彭反、普萌反、普衡反など)に當る反切が附く(言い換えれば，「享」，「烹」に通用する)のは當然だとしても，「享」にもxiǎngの他にhēng、pēngに當る反切が附くのである。「亨」，「享」は同源でもあり，字形が似ていることからの誤用だったとしても，かなり通用していた時期もあったようである。『音辨』卷二の記述はその邊りの事情を反映した『釋文』の「亨」の注音状況を忠實に祖述するものといえる。それに對し，卷六は「亨」の用法のうち，「享」に通ずるもののみに焦點を當てて記述するが，必ずしも『釋文』に忠實とはいえない。卷六では『廣韻』(「許兩切」)などにも見える上聲の他に去聲の音があり，上聲と去聲とで意味が異なるかのように記されているが，『釋文』では「亨」については「享」に通ずるものは上聲の音しか附かず，「享」にもまず上聲(香兩反、許兩反、許丈反、香丈反)が付き，去聲(許亮反、音向)¹⁴¹⁾は一説として引かれるのみである。そして，その去聲の反切は『左傳』の一例を除けばすべて『毛詩音義』の引く徐邈說，『周禮音義』『儀禮音義』の引く劉昌宗說である。上聲と去聲の読み分けが意味の違いによる異讀でないのは，『周禮音義』が「凡祭祀賓客，共其果臝，享亦如之」(地官・場人)の「享」について「許丈反」とした上で「劉凡享皆音向」とすることからも明らかである。

140) 4例。「能烹(普彭反，炙也)」(『禮記』曲禮上)，「將烹(普庚反)」(『左傳』哀公十六年傳)，「烹(普庚反，不當加火)」(『老子』德)，「烹之(普彭反，炙也)」(『莊子』山木)。但し，阮元本『禮記』は「能烹」を「能亨」に作る。

141) 「享于(許兩反，徐許亮反，注及下同)」(『毛詩』小雅・信南山)，「以享(許兩反，徐又許亮反)」(小雅・大田)，「以享(許丈反，徐許亮反)」(大雅・旱麓)，「我享(許丈反，徐許亮反)」(周頌・我將)，「享先王(許兩反，劉音向，注享幣同)」(『周禮』天官・大宰)，「以享(許丈反，劉音向，後皆放此)」(天官・獸人)，「鬼享(許丈反，劉虛讓反，牛人職同)」(地官・鼓人)，「享亦(許丈反，劉凡享皆音向，後放此)」(地官・場人)，「四享(四，依注音三，享音香丈反，劉虛讓反)」(『儀禮』覲禮)，「享宴(許丈反，舊又許亮反，本亦作饗)」(『左傳』成公十二年傳)。

(48) 假

『音辨』卷三(12a)「假，借也，大也（工馬切），假，與也（古訝切），假，至也（庚白切，易王假有廟¹⁴²⁾），假，遠也（音遐¹⁴³⁾），假，嘉也（音暇，詩假樂成王¹⁴⁴⁾）」

『音辨』卷六(10b)辨彼此異音「取於人曰假（古雅切），與之曰假（古訝切，春秋傳¹⁴⁵⁾不以禮假人）」

『廣韻』上三十五馬・櫃（古疋切）小韻「假，且也，借也，非真也，說文又作假，至也，又姓，…」，去四十禡・駕（古訝切）小韻「假，借也，至也，易也，休假也，又古雅切」

『音辨』、『廣韻』の見母の上聲（「工馬切」、「古疋切」、「古雅切」）と去聲（「古訝切」）の區別は現代語のjiǎとjiàの読み分けと同じである。「至也」と訓じられる「庚白切」の「假」は、『釋文』の「假」の音のうち半数近くを占める¹⁴⁶⁾。『音辨』辨字同音異は、「遐」に通じる例、「嘉也」と訓じられる例など、『釋文』の「假」の音を列挙するが、卷六辨彼此異音は「借りる」と「貸す」と意味にも関連性があり、音も聲調のみが異なる（上聲、去聲）組み合わせのみを取り上げる。

(49) 壞

『音辨』卷五(14b)「壞，自敗也（胡怪切），壞，毀佗也（音怪），壞，病也（音瘥，詩譬彼壞木，疾用無枝¹⁴⁷⁾，又音回），壞隕，魯地也（音懷，春秋傳喪及壞隕¹⁴⁸⁾）」釋文「壞，徐音懷，又戸怪反」。

『音辨』卷六(10b)辨彼此異音「毀之曰壞（音怪，書序共王壞舊宅¹⁴⁹⁾），自毀曰壞（戸怪切，春秋傳魯大室壞¹⁵⁰⁾）」。

142)『周易』萃卦辭。注「假，至」，釋文「更白反」。

143)『毛詩』下武「登假」の釋文に「音遐，已也，本或作遐」，『禮記』曲禮下「登假」釋文に「音遐，注同，已也」。

144)「假樂」は大雅の篇名。序に「假樂，嘉成王也」。釋文「假樂，音暇，嘉也」。『禮記』中庸は詩を引いて「假樂」を「嘉樂」に作る。

145)『左傳』莊公十八年傳。杜注に「侯而與公同賜，是借人禮」。

146)『周易』家人「王假」、萃「王假」、豐「王假」、渙「王假」、『毛詩』大雅・雲漢「昭假」、烝民「昭假」、周頌・噫嘻「假爾」、魯頌・泂水「昭假」、商頌・烈祖「假」（鄭音）、「來假」、玄鳥「來假」、長發「昭假」（毛音）、『周禮』春官・大宗伯「假祖」、『禮記』王制「歸假」、禮器「龍假」、樂記「假祖」、祭統「公假」、孔子閒居「昭假」、『莊子』大宗師「登假」釋文（「庚白反」のほか、「音格」「更白反」「古百反」）。『說文』にも「假，非真也，从人段聲，一曰至也，虞書曰假于上下」（八篇上人部）とあり、「假」を「至」の義で用いることには根拠があるといえるが、段玉裁は『說文』二篇下彳部に「假，至也，从彳段聲」とあることから、「至」の義の本字は「假」だと考え、「假」の「一曰至也」について「淺人不得其例，乃于虞書曰之上，妄加一曰至也四字」とし、段注本では削っている。

147)『毛詩』小雅・小弁。釋文「壞木，胡罪反，又如字，瘥也，說文作瘥，云病也，一曰腫旁出也，又音回」。

148)『左傳』定公元年傳。釋文「壞隕，徐音懷，又戸怪反，…」。

149)『壞』釋文「音怪，下同，字林作數，云公壞反，毀也」。

150)『左傳』文公十三年經に「大室屋壞」注に「大廟之室」釋文「大，音泰，注及傳同」

『廣韻』去十六怪（古壞切）小韻「敷，毀也，壞，上同，又胡怪切」，壞（胡怪切）小韻「壞，自破也」。

「壞」は現代漢語では「胡怪切」に對應する huài 一音のみだが、『廣韻』では自動詞「壊れる」は匣母，他動詞「壊す」は見母で音が異なる。『釋文』ではこの自動詞と他動詞の「壊」のほか，地名の壞隕の「壊」と「痍」と讀ませる「壊」には「痍」の音¹⁵¹⁾が附く。ただし，地名の「壊」も自動詞の「壊」と同じ去聲で讀むのが普通のように，平聲で讀むのは徐邈説であり，「胡罪反」が附くのも「壊」を「痍」に讀むということであって，「壊」に「胡罪反」という音があるということではない。『音辨』辨字同音異では，『釋文』の「壊」の音を全て並べるが，卷六辨彼此異音では自動詞・他動詞の二音を取り上げている。直音と反切を用いているが，直音と同じ反切下字を用いていることから，同韻であることは一目瞭然である。なお，この自動詞・他動詞の區別については『釋文』條例にも言及がある¹⁵²⁾。

(50) 見

『音辨』卷三(18a)「見，視也（古甸切），見，顯也（胡甸切），見，棺衣也（古覓切，禮實見間，而后折入¹⁵³⁾」。

『音辨』卷六(11a)辨彼此異音「上臨下曰見（古甸切），下朝上曰見（胡甸切），視之曰見（古甸切），示之曰見（胡甸切）」

『廣韻』去三十二霰・見（古電切）小韻「見，視也，又姓，…，又胡電切」，見（胡甸切）小韻「見，露也，現，俗」。

三十一禡（古覓切）小韻「禡，禡裙」，「間，廁也，…，又音平聲」，「覲，視也」

現代漢語では「見」は jiàn 一音だが，古代漢語の「見」（胡甸切 xiàn）の役割を現代語では専ら「現」が擔っているからである。『音辨』辨字同音異は『廣韻』の二音のほかに，『禮記』雜記の「棺衣」と訓じられる「見」の釋文の音を載せる。辨彼此異音は「見」本來の二義二音について，上下關係と能動・受動の二側面から違いを解釋するが，上下關係が主動・受動とい

151) 『廣韻』上十四賄・痍（胡罪切）小韻「痍，木病無枝」。

152) 「…，夫自敗（蒲邁反）敗他（蒲敗反）之殊，自壞（呼怪反）壞撤（音怪）之異，此等或近代始分，或古已爲別，相仍積習，有自來矣」。

153) 『禮記』雜記上。「實見間藏於見外，禡內也」釋文「實見，音間廁之間，棺衣也，注同，間如字，注同，徐古覓反，一解云，鄭合見間二字共爲覲字，音古辯反」。また，『儀禮』既夕禮「藏器於旁加見」注に「見，棺飾也」。

う機能から来るものであることは既に黄坤堯¹⁵⁴⁾も指摘している。

(51) 告

『音辨』卷一(13b)「告，喻也（古奥切），告，白也（古毒切），告，讀書用法也（音鞠，禮其刑罪，織剝，亦告於甸人¹⁵⁵⁾」。

『音辨』卷六(11a)辨彼此異音「下白上曰告（古禄切，禮爲天子出必告¹⁵⁶⁾），上布下曰告（古報切，書予誓告汝¹⁵⁷⁾」。

『廣韻』去三十七号・誥（古到切）小韻「告，報也，說文作告，又音拮」，入二沃・桔（古沃切）小韻「告，又音誥，告上曰告，發下曰誥」。

去三十七号・誥（古到切）小韻「誥，告也，謹也」

『音辨』辨字同音異は『廣韻』の二音に加えて、『禮記』文王世子に見える「鞠」（尋問する）に讀む「告」の音を載せる。卷六辨彼此異音は，下から上を入聲，上から下を去聲とするが，黄坤堯はこれについても能動・受動の機能の違いに由來すると考える¹⁵⁸⁾。

(52) 共

『音辨』卷一(23b)「共，恭也（俱容切），共，持也，法也（九勇切），共，具也（居用切），共，同也（渠用切）」

『音辨』卷六(11a)辨彼此異音「上賦下曰共（九容切），下奉上曰共（九用切）」

『廣韻』上平三鍾・恭（九容切）小韻「共，共城縣，在衛州，又渠用切」，去三用・共（渠用切）小韻「共，同也，皆也」。

上平三鍾・恭（九容切）小韻「恭，恭敬也，說文本作肅也，又姓，…」「供，奉也，具也，設也，給也，進也，又居用切」，上二腫・拱（居悚切）小韻「拱，手抱也，又歛手也」，去三用・供（居用切）小韻「供，設也，…，又居容切」

『釋文』で「音恭」と注される「共」には「恭」に讀む「共」、地名の「共」などのほか、「供」

154) 黄坤堯 1997, p.146 に「尊卑問題與施事受事實同一事」。

155) 『禮記』文王世子に「其刑罪，則織剝，亦告于甸人」，注に「告讀為鞠，讀書用法曰鞠」。釋文「告，依注作鞠，久六反」。

156) 『禮記』曲禮上に「夫為人子者出必告，反必面」。「下白上」という義釋からも「天子」は「人子」の誤りではないかと思われる。釋文「告古毒反」。

157) 『尚書』甘誓，秦誓。釋文に音はない。

158) 黄坤堯 1997, p.146 に「一讀入聲 B 音，其用法與「見」字相似，…」。

に讀む「共」¹⁵⁹⁾が目立つ。「九勇反」は5例あり、2例¹⁶⁰⁾は「執也」、3例¹⁶¹⁾は「拱」に讀むものである。『音辨』辨字同音異は「居用切」(見母)を「供」に通じる「共」に當てるが、先に述べたように『釋文』では「供」に讀む「共」には「音恭」という音注が多い。「居用切」は『論語』郷黨「子路共之」(集解「子路以其時物故共具之」)の釋文「共之、本又作供、九用反、又音恭、注同」に基づくのだろう。「如字」は「渠用切」である。辨彼此異音は「供」に讀む「共」の意味の違いを取り上げ、反切上字を共通の「九」にするとともに、平聲を上から下への「供」、去聲を下から上への「供」と解釋する。この根據は『論語』の釋文なのかもしれない。

(53) 遺

『音辨』卷一(17a)「遺、亡也(以迫切)、遺、與也(惟季切)、遺、從也(音隨、詩莫肯下遺¹⁶²⁾)」。

『音辨』卷六(11a)辨彼此異音「有所亡曰遺(以迫切)、有所與曰遺(羊季切)」。

『廣韻』上平六脂・惟(以迫切)小韻「遺、失也、亡也、贈也、加也、又姓、急就章有遺餘、又以醉切」、去六至・遺(以醉切)小韻「遺、贈也、……、又音惟」

上平五支・隨(旬爲切)小韻「隨、從也、順也、又姓、…」

『廣韻』の二音の音義關係は現代漢語の二音 yí、wèi と同じである。『音辨』辨字同音異は二音に加えて「隨」に讀む例を載せる。卷六辨彼此異音は「遺」本來の二音二義を取り上げ、同じ形式を用いて釋すことにより二義を關連づけようとする。

159) 『釋文』には「共苕菜、音恭、本或作供、下共苕菜並同」(『毛詩』周南・關雎)、「共祭、音恭、本或作供、注同」(召南・采蘋)、「下共、音恭、本亦作供」、(小雅・十月之交)、「不共、音恭、本亦作供」(小雅・巧言)、「主共、亦作供、音恭」(小雅・楚茨)、「以共、音恭、本亦作供」(大雅・板)、「當共、音恭、本或作供、同、後放此」(『儀禮』聘禮)、「共給、音恭、本或作供」(『禮記』曲禮上)、「共焉、音恭、本亦作供」(『禮記』檀弓上)、「不共、音恭、本又作供、音同」(『左傳』隱公三年經)、「不共、音恭、本亦作供」(隱公九年傳)、「不共、音恭、本亦作供、音同、注及下同」(隱公十一年傳)、「不共、音恭、本又作供」(閔公二年傳)、「不共、音恭、本亦作供、下及注同」(僖公四年傳)、「共之、音恭、本亦作供」(僖公二十四年傳)、「共其、音恭、本亦作供」(僖公三十年傳)、「以共、音恭、本亦作供、下同」(文公九年經)、「共時、音恭、本亦作供、下文同」(成公十八年傳)、「有共、音恭、本又作供、下同」(襄公二十八年傳)、「共事、音恭、本亦作供」(穀梁傳)隱公七年)、「以共、音恭、一本作供、下同」(桓公十四年)、「以共、音恭、本又作供」(僖公二十六年)など。

160) いずれも『毛詩』。大雅・抑「克共明刑」傳「共、執」釋文に「克共、九勇反、執也、注同」、大雅・韓奕「虔共爾位」傳「共、執也」箋「古之恭字或作共」釋文に「虔共、毛九勇反、執也、鄭音恭、云古恭字」

161) いずれも『儀禮』。鄉飲酒禮「司正實觶、降自西階、階間北面坐奠觶退、共少立」注「共、拱手也」釋文に「退共、九勇反、注同」、鄉射禮釋文に「共而、九勇反、下共而俟同」、『儀禮』大射釋文に「共而、九勇反、下共而去皆同」。

162) 『毛詩』小雅・角弓。箋「遺讀曰隨」釋文「遺、王申毛如字、鄭讀曰隨」。

(54) 畜

『音辨』卷五(15a)「畜，聚也（恥玉切），畜，養也（許六切），畜，六畜也（許又切）」。

『音辨』卷六(11b)辨彼此異音「聚謂之畜（敕六切），養謂之畜（許六切）」。

『廣韻』去四十九宥・𩚑（許救切）小韻「𩚑，𩚑産，亦作畜」，畜（丑救切）小韻「畜，六畜，丑救切，又許宥、許六、丑六三切」，入一屋・蓄（許竹切）小韻「畜，養也，說文曰，田畜也，淮南子曰，玄田爲畜，又丑六、許救二切」，蓄（丑六切）小韻「蓄，蓄冬菜，詩曰我有旨蓄，鄭玄云，蓄，聚美菜以禦冬月乏無時也，本亦作畜」

『音辨』には『廣韻』の「丑救切」に当たる音が見えない。『廣韻』の「丑救切」の訓は「六畜」だが、「六畜」の『釋文』音は「許又反」のようである¹⁶³⁾。『音辨』辨字同音異は「恥玉切」（丑六切）は「たくわえる」，「許六切」は「やしなう、かう」，「許又切」は「六畜」の「畜」（家畜）のことだと解釋する。卷六辨彼此異音は入聲の二音を取り上げるが、反切下字に同じ「六」を用いている。

(55) 射

『音辨』卷二(16a)「射，發弓弩矢也（神夜切），射，指的命中也（神亦切），無射，律也（音亦，禮季秋之月律中無射¹⁶⁴⁾），僕射，官也（音夜，古者尚武，故以射命官，後語轉為此音）」。

『音辨』卷六(11b)辨彼此異音「命中曰射（神亦切，易射隼于高墉之上¹⁶⁵⁾），以禮曰射（神夜切，大射，鄉射是也）。

『廣韻』去四十禡・夜（羊謝切）小韻「射（僕射）」，射（神夜切）小韻「射（射弓也，周禮有五射，…，又姓，…，又音石，又音夜，僕射也）」，入二十二昔・繹（羊益切）小韻「射（無射，九月律）」，麇（食亦切）小韻「射（世本曰，逢蒙作射，又姓，吳有中書郎射慈，又神柘切，又羊謝、羊益二切）」。

『廣韻』、『音辨』辨字同音異はともに船母・喻母と禡韻・昔韻の組合せの四音を載せる。「僕射」の「射」（喻母禡韻）、「無射」の「射」（喻母昔韻）については問題ない。船母の二音について

163) 「許六反，注同，即六牲也」（『周禮』天官・庖人），「許又反」（天官・司書），「許又反，後六畜皆同」（地官・小司徒），「許又反，下皆同」（夏官・職方氏），「許又反，注同」（『左傳』僖公十九年傳），「許又反，又褚六反」（昭公二十五年傳）。6例のうち，5例が「許又反」，1例のみ「許六反」，また5例のうち1例に又音に「褚六反」。

164) 『禮記』月令。注「無射者，夾鍾之所生，…」釋文「射音亦」。

165) 『周易』解象辭上六「上六公用射隼于高墉之上 獲之无不利」，繫辭下「易曰，公用射隼于高墉之上，獲之，无不利」。釋文「用射，食亦反，注、下同」。繫辭下釋文「射，食亦反，下、注同」。

『廣韻』は意味の違いを明確にしていないが、『音辨』は禡韻の方を弓を射ること、昔韻の方を弓を射て矢が命中することと解釋している。卷六辨彼此異音は意味に関連のあるその二音二義を取り上げる。

(56) 取

『音辨』卷一(25a)「取，求也（七庚切）」，取，納女也（音娶，禮取於異姓¹⁶⁶⁾），取慮，縣也（七由切，杜預曰，下邳有取慮縣¹⁶⁷⁾）。

『音辨』卷六(12a)辨彼此異音「制師從己曰取（七與切，禮曰，禮不聞取人¹⁶⁸⁾），屈己事師曰取（七句切，禮曰，禮聞取於人）」。

『廣韻』上九襄・取（七庚切）「取，收也，受也」，上四十五厚・趣（倉苟切）小韻「取，又七庚切」。去十遇・娶（七句切）小韻「娶，說文曰，取婦也」

『釋文』には音の附く「取」が45あるが、『音辨』辨字同音異の挙げる『左傳』に見える地名「取慮」と辨彼此異音の挙げる『禮記』曲禮上「取於人」「取人」の「取」を除けばほとんどすべて「娶」に讀む例で直音注「音娶」のほか、「七住反」「七喻反」「七樹反」（清母遇韻）など去聲の反切が附く。これは曲禮「取於人」の音と同じである。辨字同音異は「如字」のほかに「娶」に讀む「取」と地名の「取慮」の「取」を載せるが、卷六辨彼此異音は曲禮の「取人」「取於人」の釋文の上聲（「如字」）と去聲（「七樹反」）に變音構詞的な意味を讀みとろうとする。

(57) 仰

『音辨』卷三(12a)「仰，舉也（語兩切），仰，恃也（吾仗切），仰仰，威武也（五剛切，鄭衆說，禮軍旅之容，闕闕仰仰¹⁶⁹⁾）」。

『音辨』卷六(12a)辨彼此異音「上委下曰仰（魚亮切），下瞻上曰仰（語兩切）」。

『廣韻』上三十六養・仰（魚兩切）小韻「仰，偃仰也，說文舉也」，去四十一漾・輦（魚向切）小韻「仰，又魚兩切」。

下平十一唐・印（五剛切）小韻「印，高也，我也，又姓，…，又魚兩切」。

166)『禮記』郊特牲「夫昏禮萬世之始也，取於異姓，所以附遠厚別也」釋文「取於，音娶，本又作娶」。

167)『左傳』昭公十六年傳「二月丙申，齊師至于蒲隧」注「蒲隧，徐地，下邳取慮縣，東有蒲如陂」釋文「「取慮，上音秋，下力居反，如淳，取，音陬訾之陬，慮，音邾婁之婁」。

168)『禮記』曲禮上「禮聞取於人，不聞取人」注「謂君人者，取於人謂高尚其道，取人謂制服其身」釋文「取於人，舊七樹反，謂趣就師求道也，皇如字，謂取師之道」「取人，如字，謂制師使從己」。

169)『周禮』地官・保氏「養國子以道，…，乃教之六儀，一曰祭祀之容，…，二曰五曰軍旅之容，…」注引く鄭司農說。釋文「仰仰，本又作印，五剛反」。

『音辨』辨字同音異は『廣韻』の二音に加えて「印」に通じる「仰」の音を載せるが、『釋文』で音が附される「仰」7例のうち、3例¹⁷⁰⁾は「印」に通じる「仰」である。残りの4例¹⁷¹⁾は「如字」で去聲の反切は又音、そのうち3例は徐邈説である。『釋文』では上聲と去聲の「仰」が意味によって読み分けられているようにも見えないが、『音辨』は上聲を「あおぐ」、去聲を「たのむ」の意と解釋する。『音辨』卷六辨彼此異音はその二音の意味について「上」「下」を對比的に用いて釋している。

(58) 少

『音辨』卷一(12b)「少，鮮也（書沼切），少，稚也（施照切）」。

『音辨』卷六(12a)辨彼此異音「凡微曰少（施沼切），其降曰少（施照切）」。

『廣韻』上三十小・少（書沼切）小韻「少，不多也，…，又式照切」，去三十五笑・少（失照切）小韻・「少，幼少，漢書曰，少府，秦官，…，又漢複姓，…，又失沼切」。

『廣韻』の二音の音義は現代漢語の shǎo、shào と同じである。『音辨』辨字同音異も卷六辨彼此異音もこの二音を記載するが，辨彼此異音は反切上字に同じ「施」を用いる。

(59) 披

『音辨』卷五(2b)「披，張也（普碑切），披，柩行夾引者也（彼義切，禮設披周也¹⁷²⁾），披，分也（普彼切，春秋傳崇諸侯之姦，而披其地¹⁷³⁾）」

『音辨』卷六(12a)辨彼此異音「開謂之披（鋪悲切），分謂之披（鋪彼切）」。

『廣韻』上平五支・披（敷羈切）小韻「披，又作𦵏，開也，分也，散也」，上四紙・𦵏（匹靡切）小韻「披，開也，又偏羈切」

『音辨』辨字同音異は、『廣韻』の二音の意味について平聲を「はる」「ひらく」、上聲を「わける」と解釋し，二音に加えて「柩行夾引者」（棺にかける紐）の音「彼義反」¹⁷⁴⁾を載せる。卷六辨彼此異音は『廣韻』の二音を取り上げ，ともに反切上字に「鋪」を用いる。

170)「仰仰，本又作印，五剛反」（『周禮』地官・保氏），「威仰，如字，劉五郎反」（春官・小宗伯），「低仰，五郎反」（『儀禮』既夕禮）。

171)「委仰，如字，又魚亮反」（『周易』屯），「仰，如字，徐五亮反」（『尚書』說命下），「仰，如字，徐五亮反」（畢命），「之仰，如字，徐五亮反，下同」（『左傳』襄公十九年傳）。

172)『禮記』檀弓上「設披，周也，設崇，殷也，綢練設旒，夏也」注「披，柩行夾引棺者」釋文「設披，彼義反」。

173)『左傳』成公十八年傳。注「披猶分也」釋文「而披，普彼反，注同，分也」

174)『釋文』に3例ある。「設披，彼義反，劉方寄反，下同」（『儀禮』既夕禮），「設披，彼義反」（『禮記』檀弓上），「縵披，彼義反，徐甫髮反，下同」（喪大記）。

(60) 播

『音辨』卷五(4b)「播，布也（補過切），播，動也（彼我切，春秋傳焉用自播揚焉¹⁷⁵⁾」。

『音辨』卷六(12a)辨彼此異音「揚謂之播（補我切），布謂之播（補臥切）」。

『廣韻』去三十九過・播（補過切）小韻「播，揚也，放也，弃也，說文曰撞也，一曰布也，又姓，播武殷賢人」。

上三十四果・跛（布火切）小韻「簸，簸揚，又布箇切」，去三十九過・播（補過切）小韻「簸，簸揚，又布火切」

『廣韻』に見えない「彼我切」の「播」は「簸」に通じる。『釋文』では去聲が10例，上聲が4例，「音波」が1例¹⁷⁶⁾ある。『音辨』は去聲を「布也」，上聲を「動也」とするが，『論語』微子「播粃武，入於漢」（集解「孔曰，播，搖也」）の釋文は「播，彼佐反，搖也」である。『釋文』の注音は必ずしも『音辨』の解釋通りにはなっていない。辨字同音異も辨彼此異音も同じ二音を載せるが，辨彼此異音はどちらも反切上字に「補」を用いている。

(61) 樂

『音辨』卷二(20a)「樂，五聲八音總名也（五角切），樂，悅也（盧各切），樂，欲也（五教切），樂，治也（音療，詩泌之洋洋，可以樂飢¹⁷⁷⁾」。

『音辨』卷六(12b)辨彼此異音「聲和爲樂（五角切），志和爲樂（力各切）」。

『廣韻』去三十六效・樂（五教切）小韻「樂，好也，五教切，又岳、洛二音」，入四覺・嶽（五角切）小韻「樂，音樂，周禮有六樂，…，又姓，…」，入十九鐸・落（盧各切）小韻「樂，喜樂，又五角、五教二切」。

『音辨』辨字同音異は『廣韻』記載の三音に加えて「療(療)」に讀む「樂」の音を挙げる。卷六辨彼此異音は現代漢語の yuè と lè に相當する二音を取り上げ，二義ともに「和」を用いて釋し意味を関連づける。

175)『左傳』昭公三十年傳。注「播揚猶勞動也」釋文「播揚，彼我反，又波賀反，注同」。

176)『周禮』夏官・職方氏注「禹貢曰，滎播既都」釋文に「滎播，音波，下同」。阮元本『尚書』禹貢は「滎波既豬」に作る。禹貢釋文に「波，如字，馬本作播，滎播，澤名」

177) 陳風・衡門。傳「樂飢，可以樂道忘飢」箋「飢者不足於食也，泌水之流，洋洋然，飢者見之，可飲以療飢」釋文「以樂，本又作療，毛音洛，鄭力召反，沈云，舊皆作樂字，逸詩本有作疒下樂，以形聲言之，殊非其義，療字當從疒下寮，案說文云，療，治也，療或療字也，則毛本止作樂，鄭本作療，注放此」。『說文』七篇下疒部に「療，治也，从疒樂聲，療，或从寮」

(62) 被

『音辨』卷三(15b)「被，寢衣也（部委切），被，覆也（部偽切），被，衣也（普義切，春秋傳翠被豹舄¹⁷⁸⁾），被，不帶也（普為切）」。

『音辨』卷六(12b)辨彼此異音「箸謂之被（音披），覆謂之被（平義切）」

卷六(13a)辨字音疑混「所以覆者曰被（部委切），所以覆之曰被（部偽切）」

『廣韻』上四紙・被（皮彼切）小韻「被，寢衣也，又姓，…，又皮義切」，去五寘・髮（平義切）小韻「被，被服也，覆也，書曰，光被四表，又平彼切，寢衣也」。

上平五支・鉞（敷羈切）小韻「披，又作玃，開也，分也，散也」

上四紙・𦵏（匹靡切）小韻「披，開也，又偏羈切」

「部委切」（並母紙韻）は「皮彼切」と同音で、『音辨』『廣韻』ともに訓は「寢衣也」，「部偽切」（並母寘韻）は「平義切」と同音で、『音辨』『廣韻』ともに訓に「覆也」とある。『廣韻』にない二音のうち「普為切」（滂母支韻）は「披」と同音で，「披」に讀む「被」に附される音，「普義切」（滂母寘韻）は『左傳』「翠被」の「被」に附される音である。『音辨』卷六辨彼此異音は「音披」と「平義切」を，辨字音疑混は『廣韻』所載の二音を取り上げる。なお，『音辨』辨字音疑混に見える6字はすべて濁音の上聲、去聲の組み合わせで，現代漢語（普通語）では二音とも第四聲になるものである。

(63) 合

『音辨』卷二(15b)「合，閉也（戸閤切），合，并也（古盍切），合，浹也（音治，禮春液角則合¹⁷⁹⁾）」。

『音辨』卷六(12b)辨彼此異音「牽和曰合（古盍切），自和曰合（胡閤切）」。

『廣韻』入二十七合（侯閤切）「合同，亦器名，亦六合天地，四方對也，又州名，…，又姓，…，又漢複姓，…，又音閤」，閤（古沓切）小韻「合，合集，又音迨」。

178)『左傳』昭公十二年傳。注「以翠羽飾被」釋文「翠被，普義反，注及下同」。

179)『周禮』冬官・弓人。注「合讀為治」釋文「則合，讀為治」。

『釋文』で音が附される「合」25のうち、21例¹⁸⁰⁾は二音が併記され、二音の意味の違いが明確ではない。『音辨』は「如字」の方を「あう」、「音閣」の方を「あわせる」と解釋する。例によって、辨字同音異は『釋文』の音をすべて列べるが、卷六彼此異音は意味に關連性のある二音のみを取り上げる。

(64) 夏

『音辨』卷二(17a)「夏，大也（胡雅切），夏，木也（古雅切，禮夏楚二物¹⁸¹⁾，收其威也）」。

『音辨』卷六(13a)辨字音疑混「四方廣大曰夏（胡賈切，中夏也），萬物盛大曰夏（胡嫁切，冬夏也）」。

『廣韻』上三十五馬・下（胡雅切）小韻「夏，大也，又諸夏，亦州名，…，又胡駕、古下二切，去四十禡・暇（胡駕切）「夏，春夏，又胡雅切」

『音辨』辨字同音異は『廣韻』の二音のうち「如字」の季節の「夏」を載せず、「榎」に讀む「夏」の音を載せる。卷六辨字音疑混は、『廣韻』の二音二義を取り上げ、反切上字に「胡」を用い解釋に「大」を用いて、音の近さと意味の關連性を示す。濁音であるため、「華夏」、「中夏」などの「夏」は上聲、季節の「夏」は去聲だが、現代漢語ではともに第四聲になる。

(65) 近

『音辨』卷一(17b)「近，邇也（其謹切），近，附也（其靳切），近，辭也（居利切，詩往近王舅¹⁸²⁾）」。

180)「合於，舊音閣，又如字，下同」（『尚書』序），「合，如字，徐音閣」（益稷），「治合，如字，又音閣，下同」（『周禮』天官・疾醫），「合此，如字，劉音閣」（冬官），「而合，音閣，又如字」（冬官・輪人），「合甲，如字，舊音閣，注同」（冬官・函人），「合九，如字，一音閣，下同」（冬官・弓人），「乃合，如字，劉音閣，下合足同」（『儀禮』鄉射禮），「合足，如字，劉音閣」（大射），「合，如字，或音閣」（『禮記』曲禮下），「請合，如字，徐音閣，後合葬皆同」（檀弓上），「不合，如字，徐音閣」（王制），「合語，如字，徐音閣，注同，下大合樂放此」（文王世子），「合土，如字，徐音閣」（禮運），「合，如字，徐音閣」（郊特牲），「將合，如字，徐音閣」「合，徐音閣，又如字」（昏義），「合樂，如字，徐音閣」（鄉飲酒），「合其，如字，徐音閣」（燕義），「收合，如字，一音閣」（『左傳』成公二年傳），「補合，如字，一音閣」（昭公二年傳）。「如字」（見母）は1例。『尚書』禹貢「導弱水至于合黎」「合黎，水名，在流沙東」釋文「合，如字」「音閣」（見母）は2例。『禮記』檀弓下「杜氏之葬在西階之下，請合葬焉」釋文「合葬，音閣，下同」。ただし，檀弓上の釋文に「請合，如字，徐音閣，後合葬皆同」。また，『禮記』月令「命樂師大合吹而罷」釋文「合，古荅反」。1例は「治」に讀む。注179参照。

181)『禮記』學記。「夏，梧也，楚，荊也，二者所以撲撻犯禮者」釋文「夏楚，古雅反，注同」。

182)大雅・崧高。傳「近，已也」箋「近，辭也，聲如彼記之子之記」釋文「近，音記，毛已也，鄭辭也」。毛居正は『說文』五篇下丌部「迕（从辵从丌，丌亦聲，讀與記同）を引いて「今作迕，音記，字訛作近，不敢改也」とする。（『六經正誤』卷三崧高）

『音辨』卷六(13a) 辨字音疑混「相隣曰近（巨隱切），相親曰近（巨刃切）」。

『廣韻』上十九隱・近（其謹切）小韻「近，迫也，幾也，其謹切，又其斬切，去二十四歛・近（巨斬切）小韻「近，附也，巨斬切，又巨隱切」。

『音辨』辨字同音異は『廣韻』の二音（群母隱韻と群母歛韻）に加えて大雅・崧高の釋文に見える音を載せるが、これは「近」字の誤りと考えられている。『釋文』は「近」については音を注するのではなく「如字」、「附近之近」という釋し方をする。『音辨』によると、「如字」が上聲、「附近之近」（ちかづく）が去聲である。卷六辨字音疑混は反切上字に共通に「巨」を用いるとともに同じ形式で解釋することにより二義を關連づける。「近」も濁音であるため上聲去聲ともに現代漢語では第四聲になる。

三 おわりに

『音辨』卷二～卷五（辨字同音異）と卷六（辨字音清濁、辨彼此異音、辨字音疑混）に重出する文字についてそれぞれの記載内容をみた。『音辨』自序に「一日辨字同音異，凡經典有一字數用者，咸類以篆文，釋以經據，先儒稱當作、當爲者，皆謂字誤，則所不取，其讀日、讀爲、讀如之類，則是借音，固當具載」というように、辨字同音異は、字を『說文』の部首の順に配列し、經注に根據のあるものは、古注に「讀日」「讀爲」「讀如」という通用の例についても採録している。それに對して、卷六の三門の記述は三音以上の異讀がある字も必ず二音二義を一組として選擇し、音については聲母が同じ場合は反切上字を韻母が同じ場合は反切下字を共通にすることが比較的多い。義釋は、辨字音清濁門では「甲，…也，…曰甲」、「甲，…也，所以…曰甲」、「甲，乙也，既乙曰甲」、「甲，…也，謂…曰甲」、「甲，…也，…者曰甲」の五形式、辨彼此異音、辨字音疑混ではすべて「…曰甲，…曰甲」という形式が用いられ、「…」の部分には前後で共通の文字を用いることが多い。その解釋は、辨字同音異が經注の訓に根據を求めることが多く、『釋文』の音を網羅的に列挙しようとするのに對し、卷六の三門は必ずしも『釋文』に忠實でなく、『釋文』に何らかの據りどころを求めはするものの、二音二義の音義關係に無理にでも規則性を見出し、多音字の音義關係を系統的、體系的なものとして記述すべく、『釋文』の反切について時に牽強附會といわざるをえないような解釋をする。そのため、辨字同音異はいわば『釋文』注音法の解説のようなものになっているが、卷六は多音字の形態論的分析のようなものになっている。

一字に音が多數あり音により意味が異なる多音字は常用字も多く、識字教育の課程の初期段階で身につけるべき事柄だったと思われるが、228字を収めた『音辨』卷六は分量的にも手頃で記憶にも便利な多音字解説資料だったに違いない。教育課程に取り込まれたことで、多音字

に關する知識は讀書人層に深く浸透していったらう。『資治通鑑』胡三省注の音注が多音字に執拗に音を附けるのもその表れではないだろうか。『釋文』の實際の注音状況を反映してはいないとしても、『音辨』卷六の多音字音義體系は美しく整えられている。現在でも多音字が必要以上に形態論の研究對象として取り扱われるのも、『音辨』卷六が創りあげた精緻な多音字音義體系の影響が大きいように私には思われる。『音辨』卷六のうち賈昌朝の創造にかかる部分がどの程度の割合を占めるのかについては、また稿を改めて論じたい。

使用テキスト

四部叢刊本『羣經音辨』
通志堂經解本『經典釋文』
阮元本十三經注疏
澤存堂本『廣韻』

参考文献

- Downer, G. B. 1959 *Derivation by Tone-Change in Classical Chinese* Bulletin of the School of Oriental and African Studies Vol.22 pp. 258-290
黄坤堯 1988 (校訂・索引)『新校索引經典釋文』
黄坤堯 1992『經典釋文動詞異讀新探』(臺灣學生書局 臺北)
黄坤堯 1997『音韻闡微』(上海古籍 上海)
時建國 2005「『經典釋文』直音的性質」(『古漢語研究』2005-1, pp.24-28)
孫玉文 2007『漢語變調構詞研究』(商務印書館 北京)
吳傑儒 1983「異音別義之起源及其流變」『國立臺灣師範大學國文研究所集刊』27
周法高 1962『中國古代語法(構詞編)』(中央研究院史語所專刊行之三十九)
周祖謨 1946「四聲別義釋例」『輔仁學誌』13-1・2
森賀一恵 2000「四聲別義と『羣經音辨』」(『中国文学論集(興膳教授退官記念)』汲古書院 pp.501-513)
森賀一恵 2012『經典釋文』と朱熹注音(『富山大学人文学部紀要』57 pp.73-119)

本稿は平成24年度科学研究費補助金基盤研究(C)「『羣經音辨』第六卷の研究」(課題番号24520460)の成果の一部である。